
-1.0



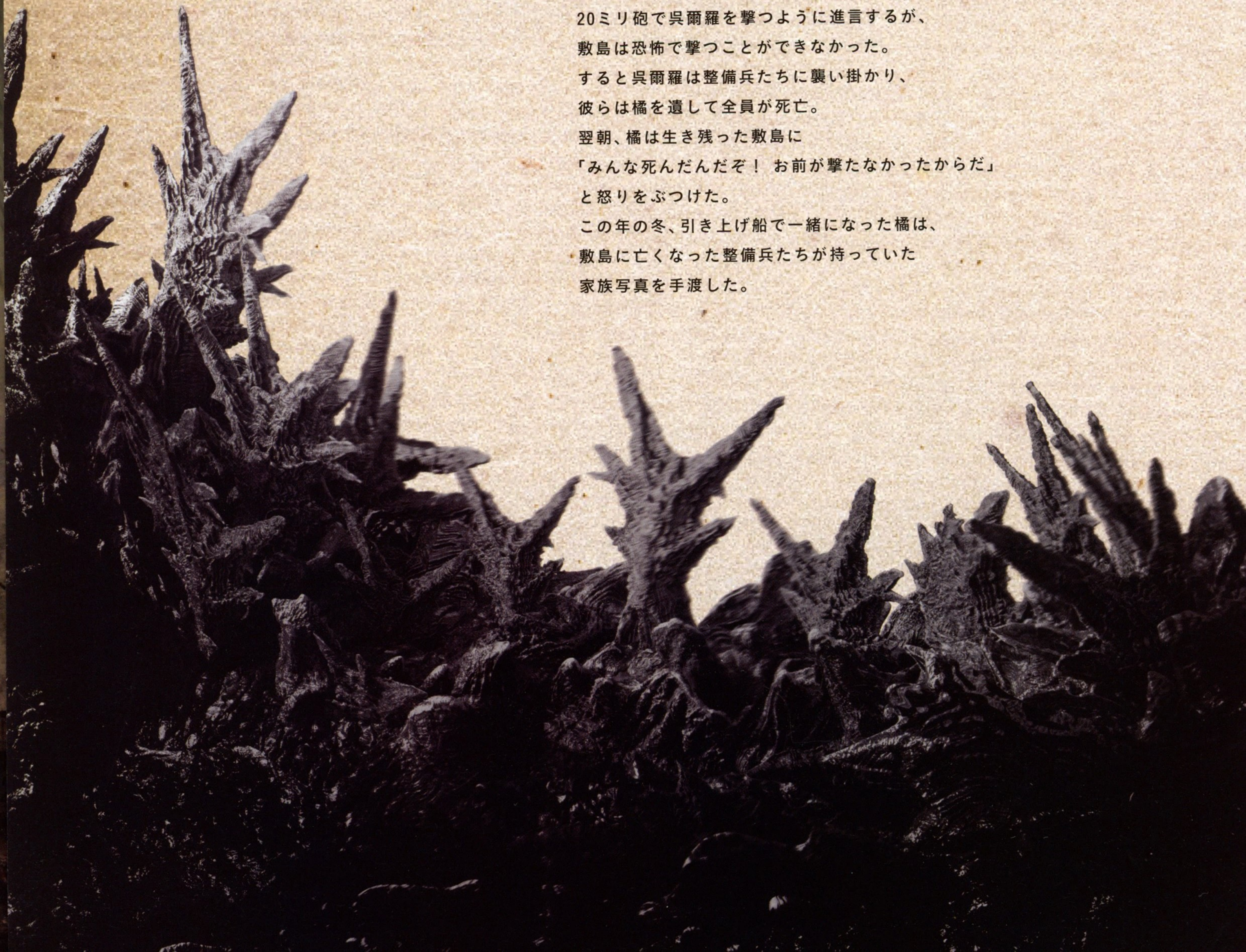
生きて、抗え。
これより先、本編の結末に
触れている部分がございます。
ご鑑賞後にお読みいただくことを
お勧めいたします。



STORY

呉爾羅、大戸島に出現！

第二次世界大戦末期の1945年(昭和20年)。
大戸島の守備隊基地に、
敷島浩一少尉(神木隆之介)が操縦する零戦が着陸した。
敷島は特攻へ向かう途中、機体が故障してこの基地に着陸したのだ。
しかしベテランの整備兵・橘宗作(青木崇高)は
故障箇所が見つからないと敷島に言い、
彼が何かを隠していることを見抜いていた。
その夜、全高15mの恐竜のような生物が基地を襲撃。
整備兵の一人がこの生物は、
島の伝説で語り継がれる「呉爾羅(ゴジラ)」だと言う。
橘は敷島に、零戦に装着された
20ミリ砲で呉爾羅を撃つように進言するが、
敷島は恐怖で撃つことができなかった。
すると呉爾羅は整備兵たちに襲い掛かり、
彼らは橘を遺して全員が死亡。
翌朝、橘は生き残った敷島に
「みんな死んだんだぞ！ お前が撃たなかったからだ」
と怒りをぶつけた。
この年の冬、引き上げ船で一緒になった橘は、
敷島に亡くなった整備兵たちが持っていた
家族写真を手渡した。




敷島










戦後日本 STORY
敷島と典子、運命の出会い。

1945年(昭和20年)、冬。焼け野原になった東京へ帰ってきた敷島は、
両親が空襲で亡くなったことを隣家に住む太田澄子(安藤サクラ)から知らされる。
天涯孤独になった彼は、闇市で、空襲の最中に託された
赤ん坊の明子を抱えた大石典子(浜辺美波)と出会う。
成り行きから彼女と明子を
自宅のバラックへ連れ帰り、共同生活を始めた。
生活のため、敷島は戦争中に米軍が残した
機雷を撤去する仕事に就く。
その撤去作業を行う特設掃海艇「新生丸」には、
彼の他に艇長の秋津清治(佐々木蔵之介)、
戦時中に兵器の開発に携わっていた元技術士官・野田健治(吉岡秀隆)、
若い乗組員の水島四郎(山田裕貴)が乗り込んでいた。
彼らには仕事を続けるうちに仲間意識が芽生え、
敷島と典子にも夫婦のような親しみが生まれていく。
だが敷島は毎晩、大戸島の悪夢でうなされ、生き残ったことに負い目を感じていた。
決して自分だけが幸せになることなどできない。
典子は苦悩する敷島を見守りながら、
幼児に成長した明子と一緒に自立するため銀座で働く決心をする。
1946年(昭和21年)、夏。米軍による核実験、
「クロスロード作戦」がビキニ環礁で行われ、
接収艦の戦艦・長門もこの実験によって沈没。
またこの時、近海を回遊していた呉爾羅も被爆。
原子爆弾によって身体を焼き尽くされ、
体表の奥深くまで紛れ込んだ放射性物質は表皮の細胞にエラーに次ぐエラーを起こし、
呉爾羅の持つ再生能力をもってしても、元の姿を取り戻すことはできなかった。
体は暴走したかのように巨大化し、それは以前の姿を遥かにしのぐ巨体と化していった。
「ゴジラ」誕生の瞬間であった。



1947年(昭和22年)。太平洋で謎の巨大生物によって米国の船舶が被害を受ける事故が続発。
被害を受けた船に残された生物の皮膚組織からは、
大量の放射能が検知される。
巨大生物は、日本へと近づいていると予測された。




















敷島
敷島

ゴジラ対「新生丸」。海上の決戦。

STORY

「新生丸」に、巨大生物を足止めしろという命令が下る。
敷島は巨大生物の正体が呉爾羅ではないかと予測し、
被害の状況からかつてより大きく凶暴になっていると判断する。
やがて「新生丸」の前に、体高50mへと変貌したゴジラが姿を現す。
敷島は船の機銃で立ち向かうが歯が立たず、
回収した機雷をゴジラにぶつけて爆破させるが効果はない。
最後の機雷をゴジラの口の中に放り込み、
これを敷島が機銃で爆発させた。
しかしゴジラは急激に細胞を再生させて完全復活。
絶体絶命と思われた瞬間、接収艦の重巡洋艦・高雄が
シンガポールから帰ってきて、戦列に加わった。
高雄の砲弾を浴びるゴジラ。
一旦は水中に消えるが、ゴジラは鯨のようにジャンプして
高雄に飛び乗り、船にダメージを与える。
ゴジラへゼロ距離から砲弾を浴びせる高雄。
たまらずゴジラは水中に落下するが、やがて海面が青い光に包まれ、
ゴジラが吐いた熱線によって高雄は海の藻屑となって消えた。
その状況を、現場から逃げながら「新生丸」の乗組員たちは、
絶望と共に見つめていた。
ゴジラとの戦いによって気を失った敷島は病院で目覚める。
彼は野田から、ゴジラが東京へ向かっていることを、
政府は混乱を恐れて国民にふせていると知らされる。
病院から自宅へ戻った敷島は、
典子に自分が特攻から逃げた人間であること、
そして大戸島での過去を語り、
そのゴジラと再び出会ったと告げる。
「自分は生きていてはいけない人間だ」と語る敷島。
典子はようやく敷島が抱えていた心の苦しみを知り、
彼に「生き残った人間はきちんと生きていくべきです」
と言って彼を抱きしめる。
そして翌朝、遂に東京へゴジラが上陸した。
















STORY

銀座襲来。
対ゴジラの
「海神作戦」決行。

鳴り響く空襲警報、そしてラジオからの緊急放送。
東京湾から品川を経て、銀座へと向かったゴジラ。
敷島は銀座で働いている典子が危ないと感じ、救出に向かう。
一方、山手線に乗っていた典子はゴジラの襲撃に遭い、
乗っていた電車の車両ごと持ち上げられるが、辛くも危機を脱出した。
逃げ惑う群衆の中、東京大空襲を思い出し、
茫然と"生"を諦めて歩いていた典子を、敷島が発見。
二人で逃げ始めると、ゴジラの背びれが青く光り出す。
熱線が放出され、そのエネルギーによる爆風を前に典子は
敷島をビル陰に押し込めて、自らは吹き飛ばされてしまう。
敷島だけが生き残り、彼はゴジラへの復讐を誓った。
ゴジラによって東京は壊滅的な被害を受けたが、
駐留連合国軍はソ連軍を刺激する恐れがあるとして軍事行動を避け、
自前の軍隊を持たない日本は民間人だけで、
ゴジラに立ち向かうことになる。
やがて民間人が集まり、
駆逐艦・雪風の元艦長・堀田辰雄（田中美央）をリーダーに
「巨大生物對策説明会」が開かれた。
そこで発表された対ゴジラ作戦を立案したのは野田。
「新生丸」のメンバーも集まっている。その名も「海神作戦」。
フロンガスの泡でゴジラを包み込み、
一気に深海まで沈めて急激な水圧の変化によって、ゴジラを倒す。
第二次攻撃として、今度は大きな浮袋を深海で膨らませ、
海底から海面まで一気にゴジラを引き揚げて、
凄まじい減圧を与えることで息の根を止めようというのだ。
「誰も守ってくれない」
「誰かが貧乏くじを引かなくてはいけない」
戦争を生き抜いた民間人たちは戦いを決意する。
一方、野田たちとは別に、敷島は独自のやり方で
ゴジラに立ち向かうことを密かに決めた。
そのために彼は、元整備兵の橘を探し始める。
「海神作戦」と敷島の対ゴジラ戦への準備が進む中、
遂にゴジラが相模湾に姿を現した……。







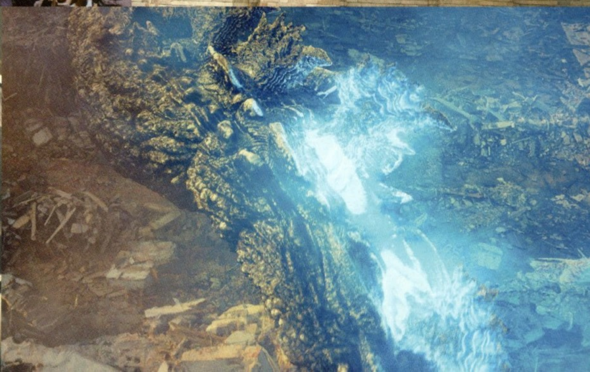














戦争から生還するも両親を失い、荒廃した日本で典子と出会う。

神木隆之介　敷島浩一

PROFILE｜1993年生まれ、埼玉県出身。95年、2歳でCMデビュー。『妖怪大戦争』(05)で第29回日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞し、一躍注目を集める。その後も『桐島、部活やめるってよ』(12)、『るろうに剣心』シリーズ(14・21)、『バクマン。』(15)、『君の名は。』(16／声の出演)など話題作に出演。浜辺美波とは『屍人荘の殺人』(19)、NHK連続テレビ小説「らんまん」(23)でも共演をした。近年の映画出演作に、『ホリック xxxHOLiC』『ゴーストブック　おばけずかん』『Dr. コトー診療所』(22)、『すずめの戸締まり』(22／声の出演)、『大名倒産』(23)などがある。

INTERVIEW

敷島の中には「生きたい」という気持ちが根本にあって、そこは一貫していると思いました。

――ゴジラ映画の主演をオファーされた時の感想は？

正直、ビビりましたね。シリーズ開始から2024年で70周年、そして30作目（国内・実写）というダブルアニバーサリーの記念すべき作品ですし、日本が世界に誇るゴジラですから。その真ん中に立たせてもらうというのは、お話を伺った時はビビりましたし、プレッシャーもありました。ただ、自分がどこまでできるのかという挑戦でもありますから、お引き受けしました。

―― 演じられた敷島は、大戸島で辛い経験をした難しい役ですね。

時代設定も育った環境も自分とは違う役でしたから、ゼロから役作りをしていきました。最初はひたすら鏡に向かって、「お前は生きていちゃいけない人間なんだ」と言い聞かせていました。携帯電話の待ち受けも「早く死ねよ」って書かれているものにして。どうやって敷島と向き合えばいいのかわからなかったので、とにかく自分を追い込めば、切羽詰まった感が出るんじゃないかと思ったんです。でもそれは自己満足でしかなかったし、勘違いだったんです。橘役の青木崇高さんに相談してみたら、青木さんも前に戦争を背景にした役を演じた時、「自分も同じ感じだった」と言っていて。やはり史実だし、当事者にしかわからない心の傷がある。それを演じるにあたって、同じような状況に置こうとして自分を追い込んだ。でも、それで自分自身が崩壊寸前になって、耐えられなくなってしまって。そこからいろいろ工夫して、何とか乗り越えたって。その話を聞いて、追い込んだからといって切羽詰まった感が出るかといったら、そうじゃないんだなって思いました。そんなことをしなくても、例えば技術的なことだったり見せ方だったりで、十分敷島が抱えているものは観ている人に伝わるんじゃないかと。なおかつ自分の精神状態がダメだと、芝居にすらならない。そう思ってから、追い込むのをやめました。一つのシーンを演じる時に、本番まで徐々に自分で気持ちを作るようにして、本番でフルスロットルの感情が出せるようにしました。

――「生きていていいのか」という自分への問いかけは、敷島役の大きなテーマでしたね。

冒頭で敷島は、特攻できなかったことを橘に「恥知らず」と思われますが、死ぬことが本当の勇気だとは一概には言えませんよね。橘は、当時の日本軍が教育した思想に則って、敷島を「恥知らず」だと思うんでしょうが、「生きたい」というのは人間の本能だと思うんです。敷島の中には「生きたい」という気持ちが根本にあって、そこは一貫していると思いました。だからこそ苦悩するわけで。戦争が終わって典子と出会うことで、「生きたい」の先に何を思うのかが、彼の中で変わっていった気がします。戦時中は「生きたい」と思って、生き残ってしまった。それが戦後には、「生きたい」という選択が正しかったのかわからなくなって、後悔に繋がる。でも典子と出会ったことで、最終的に「生きててよかった」ということにたどり着くんだと思うんです。

――彼にとって、典子はどういう存在だったのでしょう？

最初は彼女の存在が面倒だと思ったでしょうが、一緒に暮らすにつれて「何でお前はまだいるんだ」と思う回数が減っていって、いつしかいるのが当たり前の存在になっていった。なおかつ敷島にとって、典子は甘えられる存在だったと思うんです。彼女がいることで、それまでモノクロだった自分の世界が、一色、二色と増え始めて、色彩鮮やかなものになっていった。それは自然な流れだったけれど、「新生丸」のみんなに「覚悟を決めて一緒になれ」と言われて、「別に嫁さんじゃない」という返し方をした時、不本意ながら典子との距離が近づいているのに、自分でびっくりしたんじゃないかと。気持ちの上では、自分は誰かと幸せになってはいけないというのがあるけれど、彼女にはいなくなってほしくないという抗えない本能も一方にある。その本能と気持ちの葛藤が、典子に対してはあったように思いますね。

――「新生丸」の面々との撮影の雰囲気は？

船の場面の撮影は大変で、本当に沈没するかと思いました（笑）。船での撮影初日、荒波の中を船出していったんですが、もう吐きそうになって。でも他のメンバーは頑張っているし、「大丈夫？」って（山田）裕貴くんも心配してくれて、僕だけ船酔いしているわけにはいかないと思って。それで「はい、カット」という掛け声の後に（山崎）監督を見たら、酔って船に突っ伏していて（笑）。その姿を見て、自分だけじゃないんだと思って安心しました。本来は、荒波じゃない時に撮影したかったですね。

――「新生丸」の機雷で戦う場面や「震電」に乗って戦う場面など、目の前にいないゴジラと戦う場面は難しくなかったですか？

フィクションに立ち向かわなくてはいけないので、最大の恐怖というのを想像しながらやっていました。恐怖というよりも、「死に食べられる」という感覚で演じました。本当に命を落とすんだなという想いで、なるべくいようとしたんです。だから驚いたり、怖がったりという表現は、とにかく薄くならないように気をつけていました。完成した時にはすごいVFXが合成されるだろうから、その映像との温度差が出ないようにと意識していましたね。また敷島の背負っているものを思うと、「ワーッ」と声を出せばいいというものでもないので、どういう表現が的確なのかは監督と綿密に話し合いました。監督がすべてをイメージできているので、監督がOKなら基本的にOKだろうと思っていました。

――プレッシャーも感じたゴジラ映画を撮り終えた、今の気持ちは？

やはり規模がでかいなと思いました。『るろうに剣心』シリーズも大きな作品で派手でしたが、ゴジラは海外でも上映されるとか。国を超える大きさがあって、特別な作品だと実感しています。



焼け野原の戦後日本を単身で強く生きる女性。
戦争帰りの敷島と出会う。

浜辺美波　大石典子

PROFILE｜2000年生まれ、石川県出身。11年、第7回「東宝シンデレラ」オーディションにてニュージェネレーション賞を受賞。主演を務めた『君の膵臓をたべたい』(17)で第41回日本アカデミー賞新人俳優賞など数々の新人賞を受賞。以降、注目の若手俳優として多くの映画、TVドラマ、CMなどに出演。その他の映画出演作に、『映画 賭ケグルイ』シリーズ(19・21)、『アルキメデスの大戦』『屍人荘の殺人』(19)、『思い、思われ、ふり、ふられ』『約束のネバーランド』(20)、『名探偵コナン　緋色の弾丸』(21／声の出演)、『シン・仮面ライダー』(23)、『サイレントラブ』(24年1月公開予定)などがある。

INTERVIEW

日本を代表する伝統的な作品に携わらせていただいて、本当にありがたいと思っています。

――ゴジラ映画への出演をオファーされた時の感想は？

「東宝シンデレラ」のオーディションの時から、東宝の会議室にはゴジラのフィギュアがいくつも置いてありましたし、事務所（東宝芸能）の先輩方からもゴジラ映画のお話を聞かせてもらっていたので、お話をいただいて、他の作品とは少し違った感慨がありました。

――演じた典子のキャラクターを、どのように捉えましたか？

最初に脚本を読んだ時は、「あっ、子どもがいるんだ」と思いました。血は繋がっていないにしても、母親代わりの役というのは演じたことがなかったので、そこに対して驚きがありました。典子に関しては回想シーンがまったくなくて、彼女の背景は口で説明しているだけなので、その部分をどれだけ想像して自分で作り上げていくことができるのか。今まで演じたことがない役だったので覚悟もいりましたし、気合を入れ直さなきゃいけないと思いました。

――撮影現場の雰囲気は？

最初、（安藤）サクラさんと神木さんとのシーンを見学させていただきました。サクラさんが生き残って帰ってきた敷島さんを非難するようなセリフを放つと、本当に現場の雰囲気が変わって、みんなの緊張感が増すのがわかりました。山崎監督に「浜辺さんはゴジラだけじゃなく、サクラさんとも戦っていくんだよ。頑張ってね」と言われて、毎シーン緊張感を持ちながら現場に臨んでいました。

――典子は敷島の家に居候しますが、彼と暮らしていくうちに、どのような変化があったと思いますか？

典子は登場した時、図々しく押しが強い女性のような印象がありますが、実は人間らしい優しい面を持っています。一緒に住み始めた頃は、居候させてもらっている気まずさがあり、最初は敷島さんに対しては家族や、生活するパートナーのような感覚だったと思います。一緒に過ごすうちに惹かれ合っていくのですが、お互いに抱えるものがあるから、なかなか心の距離が縮まりません。やがて典子は、彼の幸せを願うなら自分はどうしたらいいのかと悩むようになり、後半では自分から家を出る決意をして、強く生きていこうという意識へと変わっていきます。

――「自分には生きていく資格がない」と言う彼に、典子は「生き残った人間はきちんと生きていくべきです」と言う場面がありましたね。

典子にも、子どもを預けられた時に、自分が責任を持って引き取ると心を決めるまでの葛藤があったと思いますし、この状況から逃げ出したいという気持ちも絶対にあったと思うんです。彼女は明子を育てることに自分が生きる理由を見つけて、それにしがみついて、希望を手繰り寄せるように生きてきたところがあり、そんな彼女には「生きていく資格がない」という敷島さんの言葉に、許せない気持ちがあったと思います。監督から、「敷島さんを説得する時には、戦争でいろんなものを失った典子の悔しさや哀しみを、ちゃんと伝えてほしい」と言われました。

――そして典子は銀座でゴジラと遭遇しますが、山手線の電車内で宙づりになる場面は大変だったのでは？

監督の脚本は映像のイメージを書いたト書きが多いので、このシーンの動きがどうなるかは、現場に行って確認しないと演技の計画が立てられないと思いました。現場で「こうなって、こう撮ります」と説明されて、「大丈夫かな」と思いました。典子は生命力が強い女性で、守るものがあるから火事場のバカ力が出るんだと自分に言い聞かせて撮影に臨みました。最初はワイヤーに吊られて、電車内の座席などに掴まっている感じを出す予定だったのですが、それだと腕への体重のかかり方で本当にぶら下がっているのかどうかがわかってしまうので、命綱はつけていますが、ほぼ自力でぶら下がっていたんです。あとは自分の筋肉との相談でしたが、腕がちぎれるかもしれないと思いました（笑）。でもアクション部さんと動きを合わせて、典子になりきって火事場のバカ力を出して乗り切りました。

――実際には目の前にいないゴジラと芝居をするのは難しくなかったですか？

最初に監督と、「ゴジラ・ザ・ライド　大怪獣頂上決戦」を見学に行ったので、何となくそこでゴジラの迫力や大きさは、脚本を読んだ時より想像しやすくなりました。ただ撮影で「遠くにゴジラがいます」と言われても、どれくらい遠くにいるのか、危機感のレベルを表現するのが難しかったです。現場にいた皆さんと、「どこ見ていますか？」と確認し合って必死にやっていました。それから逃げる群衆を演じたエキストラの方々が本当にプロで、監督に「逃げまどってください」と言われると、最初から全速力で走って、転んでも「全然大丈夫です」という感じで、皆さん気合が入っていました。

――念願のゴジラ映画への出演を終えて、どんな感想を持ちましたか？

撮影している時には、ゴジラは恐怖の対象であって、こんな怖いものが来たらどうなってしまうんだろうと想像していたんです。でも完成した映画を観ると、ゴジラはたまたま陸に上がってきて、振り返ったりしているだけで、それなのにみんなの敵にされているんだということに気がつきました。謎が多い存在で、ゴジラはどういうことを考えているんだろうと思ったら、作品に見入ってしまいました。音楽や啼き声に迫力があるので、観ていて鼓動が高まる感じもあって、やはりゴジラ映画は観る側の気持ちを満たしてくれるものがあるなと思いました。今は怪獣映画が少なくなっていますが、日本を代表する伝統的な作品に携わらせていただいて、本当にありがたいと思っています。



戦争経験のない若き「新生丸」の乗組員。

山田裕貴
水島四郎

PROFILE｜1990年生まれ、愛知県出身。「海賊戦隊ゴーカイジャー」(11〜12/EX)で俳優デビュー。以降、『HiGH&LOW』シリーズ(16〜19)、『あゝ、荒野　前篇/後篇』(17)、『あの頃、君を追いかけた』『万引き家族』(18)など話題作に次々と出演。近年の主な映画出演作に、『東京リベンジャーズ』シリーズ(21・23)、『燃えよ剣』(21)、『余命10年』『耳をすませば』『ブラックナイトパレード』『夜、鳥たちが啼く』(22)、『キングダム 運命の炎』(23)などがある。

INTERVIEW｜水島は今現在の戦争を知らない人たちを象徴したキャラクターだと思いました。

――ゴジラ映画の新作に出演が決まった時の感想は？

僕はオーディションでの決定でしたが、山崎貴監督の作品に携わりたいと以前から思っていて、作品が何なのかを知らされずにオーディションを受けたんです。台本を渡された時は、「戦争ものかな」と思いましたが、後日合格したという知らせを受けて、その時初めてゴジラ映画だとわかりました。僕は子どもの頃、『ゴジラVSキングギドラ』などゴジラ・シリーズをたくさん観ていましたし、特に『ゴジラVSデストロイア』はデストロイアがかっこよくて大好きでしたから、馴染みのあるシリーズに参加できる嬉しさがありました。

――演じた水島四郎は、「新生丸」のメンバー４人の中で、一番若い乗組員ですね。

山崎監督から、水島は軍国少年で、戦艦や戦闘機の名前を聞いただけでテンションが上がる男だと言われました。世代的に子どもの頃から戦争に行きたいと思っていた子で、彼が機雷の掃海作戦に参加しているのも、「この機雷で戦っていたのか」というのを見てみたかったからだと思うんです。艇長の秋津さんに可愛がられていて、ノリもいいし性格も明るい男ですが、本当の戦争の怖さを知らない。戦争を自分で体感していないから、軽口をたたいてしまうんですけど、そんな水島は今現在の戦争を知らないすべての人たちを象徴したキャラクターだと思いました。

――そんな戦争の現実を知らない水島が、ゴジラと遭遇して恐怖を間近に感じるんですね。

「新生丸」に乗ってゴジラを目の前にした時、あんなに戦争に行きたいと思っていた水島が、腰を抜かすほど怖がる。台本にはなかったですけど、あの時自分から倒れ込んで彼の恐怖を表現してみました。この時水島が味わった本当の絶望というのは、戦争に置き換えることもできるし、それを体現しているように見えればいいなと思いました。

――目の前にいないゴジラを相手に芝居をする難しさは？

集団でリアクションを合わせるのが難しかったですね。例えばゴジラが振り返ったとして、そこで「エッ」と驚く時。そこから向かってくるゴジラが、手を伸ばしてくるのか、しっぽを振るってくるのかで、驚いているこちらの表情が違うじゃないですか。みんなでそこにいないものを見ているので、その表情を揃えるのが大変でした。「どこ見てる？」と話し合いながらやっていましたが、芝居をどう組み立てるのかが難しかったです。ただ、「新生丸」のメンバー4人での芝居は、僕はすごく楽しかったです。

――その後、水島は「巨大生物對策説明会」にも参加し、対ゴジラ戦に臨もうとしますね。

あそこで水島は、「明日死んでもいい」と覚悟を決めていたと思います。野田さんは「一人の犠牲者も出さないようにしたい」と後で言いますけど、あのゴジラと相対して、運良く生きて帰って来られるわけがないと彼は思っている。そこまで覚悟を決めて説明会に臨めば、艇長にも認めてもらえるんじゃないかと。そんな想像をして僕はやっていました。ところが艇長に、「お前は、連れていかない」と言われる。艇長は親心もあってそう言ったと思いますが、対ゴジラ戦の日に死んでもいいと覚悟した水島には、「何でですか！」という悔しさと憤りだけがあったと思います。

――出演してみて、今までのゴジラ映画とは違った魅力を感じましたか？

僕はゴジラ映画の中でも、デストロイアやメガギラスなど、ヴィラン側の怪獣に惹かれる傾向があるんですが、ゴジラはヴィランの魅力だけでなく人間のために戦ってくれるイメージもあって、今までいろんな側面を見てきました。今回は原点回帰というか、「ゴジラって、これだよね」というものになっていると思います。またVFX技術も素晴らしくて、そういう意味で世界にも発信できるゴジラ映画ができたと思いました。

元筑波海軍航空隊整備部所属。腕利きの整備士。



青木崇高
橘 宗作

PROFILE｜1980年生まれ、大阪府出身。主な出演作に、NHK連続テレビ小説「ちりとてちん」(07〜08)、「カムカムエヴリバディ」(21)、NHK大河ドラマ「龍馬伝」(10)、「平清盛」(12)、「西郷どん」(18)、「鎌倉殿の13人」(22)、映画『るろうに剣心』シリーズ(12･14･21)など。大ヒット韓国映画シリーズの最新作、マ・ドンソク主演『犯罪都市 NO WAY OUT』(24年初春公開予定)ではメインキャラクターとして出演。バラエティ番組「ララLIFE」ではメインMCを務めている。

INTERVIEW｜**敷島を生還させることが、橘にとって戦争を終わらせることに繋がっている気がするんです。**

――ゴジラ映画への出演をオファーをされた時の感想は？

超大作でもありますし、役を聞いた時に、ゴジラ(呉爾羅)と対峙するシーンがあるのは大きな意味があると思いました。ゴジラ映画は子どもの頃から観ていたし、ゴジラのおもちゃで遊んでいた世代ですから。撮影の仕方にもすごく関心がありましたね。

――演じた橘宗作は冒頭で、敷島に忘れられない記憶を残す役ですね。

橘は敷島と同じタイミングで呉爾羅と出会う。そこから、彼と同じように人生を翻弄されて影響を受けるキャラクターですからね。脚本を読んで、橘が再び敷島と会うまでどんな人生を歩んでいったのかを、ある程度想像して表現しなくてはいけないと。そして再会した敷島にどういった態度で、どんな距離感で向き合うのかが大切なのだと思いました。

――呉爾羅との遭遇によって、橘はどんな感情を抱いたと思いますか？

これが米軍の襲撃で、自分が率いる小隊全員が亡くなったのであれば、また話は違ったと思いますが、遭遇した時には“呉爾羅”という認識もなく、恐竜のような生物が現れて小隊を全滅させたと。その事実を橘はどう処理していいのか、心の整理がつかなかったと思うんです。この体験を話しても、誰も信じてくれないと思いますし。だから敷島とは、体験を共有しているという部分では、繋がっているところがあると思うんです。それで「お前が撃たなかったからだ」と敷島を責めて、すべて彼に責任転嫁することで、整理がつかない自分の心をしまい込んでしまった。そうしたことで、彼もきっと戦後は苦しんで、敷島と同じように寝付けない日々を過ごしていた。敷島には典子という拠りどころになる人がいましたが、監督から橘は家族を失っていると聞いていましたから、話せる相手もいなくて、辛い数年を過ごしていたと思いますね。

――敷島が書いた“大戸島玉砕の原因はすべて橘にある”という嘘の手紙を見て、怒りに燃えて乗り込みに行きますね。

やり方が卑劣ですからね。大戸島のことでも許せないのに、そのアプローチの仕方が許せない。そこで彼は、すべての思いを怒りにまかせてぶつけるんです。でもこの再会があったから、橘の中で止まっていた時間が再び動き出したのも事実なんです。もしかしたら敷島は橘の中でも終わっていない戦争に、この作戦に参加させることで区切りをつけさせようと思っていたのかもしれない。そこで二人は共鳴した部分があると思っています。

――敷島は「震電」に特攻する覚悟で乗り込みますが、橘は機体に脱出装置を装着する。憎いはずの相手を、助けようとした心理は？

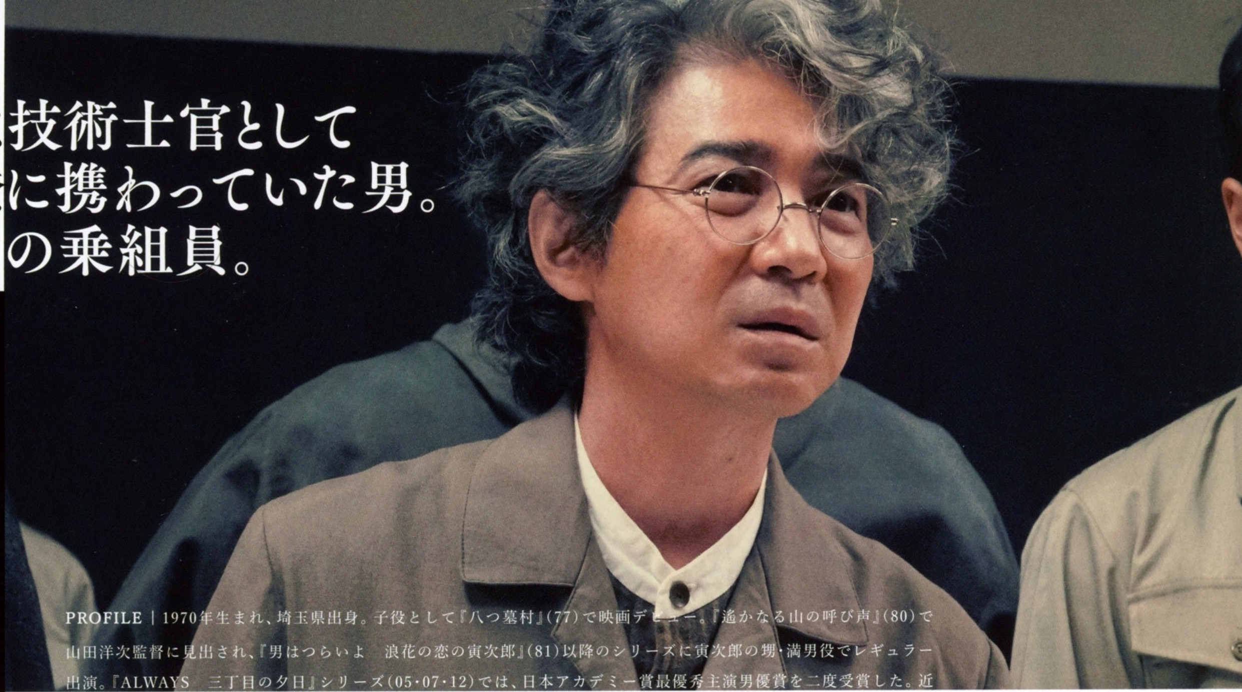
それは「震電」を整備するうちに、橘の時を動かしてちゃんと戦争を終結させようとした、敷島の気持ちを感じ取ったからだと思います。別に優しさではないと思いますが、お前がそういう意思表示をするなら、俺もお前に戦争の終わらせ方を提示しようと。それがあの脱出装置だったと思います。彼自身、大戸島で整備兵をしていた時、特攻を手助けしていたことに罪悪感があった。そのことも戦後引きずってきたと思うんです。敷島は憎い相手ではあるけれど、こいつをちゃんと生きて返すことで、彼なりの罪滅ぼしができるという想いがあったと思うし、敷島を生還させることが、橘にとって戦争を終わらせることに繋がっている気がするんです。

――「震電」は、この映画のもう一人の主役でもありますね。

実物大の「震電」を組み立てているところも拝見しましたが、やはり幻の戦闘機が目の前にあるというのは興奮しましたね。橘もまた、あの戦闘機に触れて整備ができるということに、整備士としての興奮があったと思います。この映画は、ゴジラはもちろん見ものですけれど、動く「震電」が観られるというのも見どころの一つだと思いますよ。

戦時中は技術士官として兵器開発に携わっていた男。「新生丸」の乗組員。

吉岡秀隆
野田健治



PROFILE｜1970年生まれ、埼玉県出身。子役として『八つ墓村』(77)で映画デビュー。『遙かなる山の呼び声』(80)で山田洋次監督に見出され、『男はつらいよ　浪花の恋の寅次郎』(81)以降のシリーズに寅次郎の甥・満男役でレギュラー出演。『ALWAYS　三丁目の夕日』シリーズ(05・07・12)では、日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を二度受賞した。近年の映画出演作に、『峠 最後のサムライ』『川っぺりムコリッタ』『Dr. コトー診療所』(22)、『Winny』(23)などがある。

INTERVIEW
野田に感情移入して映画を観ると、また違った見方ができるかもしれません。

――山崎監督の作品には5本目の出演ですが、今回はゴジラ映画ですね。

不思議な感じがしました。僕が『男はつらいよ』シリーズに出ている時、同時期にゴジラ映画が公開されている時代がありましたし、『男はつらいよ』で僕が演じた満男の祖父役だった志村喬さんは、第1作の山根博士ですからね。なのでお話をいただいた時、思わず「博士の役ですか？」と聞きました。それと第1作を監督した本多猪四郎先生は、『八月の狂詩曲』の時に演出補佐で入られていて、現場で先生にはよくしていただいたので、不思議な縁を感じました。お話をいただいて、最初に西武園ゆうえんちへ「ゴジラ・ザ・ライド　大怪獣頂上決戦」を観に行ったんです。そのゴジラの凄さに圧倒されて、アトラクションが終わった後、近くのベンチに1時間くらい座って、「あのゴジラを倒せるんだろうか？」と呆然としてしまいました。

――演じた野田健治は、戦時中に武器を開発していた技術屋ですね。

最初に監督から、大学に入ってメカ作りに興味を持って、独り身であるといったことが書かれた野田の履歴書をもらって、学者風ではあるけれど物作りが好きな人だろうなと。それと敷島に、「私も戦争の頃を思うと、眠れなくなる時があります」と言うシーンがありますが、彼には、海軍工廠で自分が開発した武器を背負って亡くなった人たちへの想いがあるんだろうと。最後の方で、「この国は命を粗末にしすぎてきました」と言う野田の根っこは、戦争は絶対にいけないという想いがあると思うんです。自分が作ったものが平和のためではなく、戦いに使われてしまったことに対する空しさを、嫌というほど感じた人物でしょうから。

――ただ、彼には“学者”的な一面もありますよね。

ゴジラが放射熱線を吐く場面で最初、僕は驚く顔をしていましたが、監督に「野田には、ちょっと笑ってほしい」と言われて。彼の場合は科学者として、今まで見たこともないものを見たという喜びが、そこにはあるんじゃないかと。ただ驚くのではなく、どこか冷静に状況を見ているからこそ、ゴジラが放射熱線を続けて吐けないことに気づくと思うんです。

――「新生丸」での撮影は、荒波で大変だったそうですね。

僕らよりも、スタッフが大変だったと思います。撮影の柴崎幸三さんは、腰を縄で縛って身を乗り出して、揺れる船の上でモニターを見ながらカメラを回していましたから、あの気迫を見たらこちらは弱音を吐けないですよ。僕ら俳優が乗った船には、スタッフは限定された数名しか乗れなかったので、ヘアメイクの宮内三千代さんもメイク以外の仕事をやってくれたりして。皆さんの気合を現場で感じました。

――野田は状況説明する役でもありますね。

だから説明台詞が多いんです。「巨大生物對策説明会」の場面では、100人を前に作戦を延々と説明する。それを監督は「できるだけ、早口でお願いします」と言うんです。でも観ている方に理解されないといけないですから、ただ早くしゃべればいいというものでもない。それであの場面を撮影する時は前乗りして、監督にお芝居の稽古を事前に観てもらいました。野田は状況説明をすると同時に登場人物の気持ちを汲み取る役でもあるので、彼に感情移入して映画を観ると、また違った見方ができるかもしれません。

――今回のゴジラに対して、どんな想いがありますか？

監督は脚本の最後に“神殺し”と書いていたんです。ゴジラが光に包まれて神々しく内部崩壊していく姿に、思わずみんなが敬礼する。その“神殺し”という部分に行けさえすれば、いいのかなと。ゴジラは、戦争で傷を負ってしまった野田のような人たちに、「俺を倒すことで、お前たちは生きろ」と教えに来た神のような存在で、ゴジラを倒すことでどこか登場人物たちは救われたような気がして。そう思うと、ゴジラがかわいそうになりましたね。



空襲で家族を失った女性。敷島宅の隣に住む。

安藤サクラ　太田澄子

PROFILE｜1986年生まれ、東京都出身。『百円の恋』(14)、『万引き家族』(18)で日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を、『ある男』(22)で同賞最優秀助演女優賞を受賞。NHK連続テレビ小説「まんぷく」(18〜19)ではヒロインを務めた。近年の映画出演作に、『DESTINY 鎌倉ものがたり』(17)、『怪物』(23)、『BAD LANDS バッド・ランズ』『ゆとりですがなにか　インターナショナル』(23)などがある。

INTERVIEW　澄子は日々、生きることと闘いながら過ごしている女性だと思いました。

——ゴジラ映画への出演をオファーされた時の感想は？

オファーをいただいたのはかなり前なのですが、その頃私は、自分の家庭の中にいることに比重を置いていたんです。でもゴジラに出会うことはなかなかないなと思いましたし、山崎監督とご一緒できることが嬉しかったです。山崎監督とは2015年に、北イタリアのウディネ・ファーイースト映画祭で初めてお会いしました。私は主演した『百円の恋』と『0.5ミリ』が上映されるので参加しており、監督も『寄生獣』二部作の上映のためにいらっしゃっていて。私はあまり商業映画に縁がない時期でしたから、いつか山崎監督の作品に出られることがあったらいいなと思うような、憧れの存在でした。その時に監督や皆さんといい時間を過ごして、最後に「いつか、出てね」と監督が言ってくれたんです。海外の映画祭はずいぶん行かせていただきましたが、この時の映画祭は特に印象に残っているんです。その後、『DESTINY 鎌倉ものがたり』で初めてご一緒しましたが、丁度その時私は妊娠がわかった頃で、出産前に出演した最後の作品がその映画だったので想い出深くて。山崎監督は私の大切な場面でめぐり会う特別な存在なので、また仕事ができることが楽しみでした。

——太田澄子は敷島の隣の家に住む女性で、戦争で息子を亡くしているんですよね。

あまり生活の部分が出てこない映画の中で、澄子は生活の匂いをさせる役だと思いました。この映画はそれぞれの“生きる”という気持ちを描いていますが、澄子は、戦うことによって生きようとする男性陣とは違って、日々、生きることと闘いながら過ごしている女性だと思いました。

——戦争から帰ってきた敷島をなじる登場シーンから撮影が始まったそうですね。

ところどころしか出てこない役ですから、その出方が難しかったです。特にあの初日は難しくて、気持ちの上でテンションを上げて“傾く”必要があるので緊張しました。最初に脚本を読んだ時から、あの場面では凄く嫌な奴、憎たらしい奴という感じを出さなくてはいけないと思いましたから。ただ敷島役の神木さんも監督も穏やかな人柄なので、現場自体にはとても素敵な空気感がありました。あの時、私は手拭いを持ちながら敷島と話すんです。その時の手拭いを使うやり取りや、撮影前に泥の中に入って衣裳を汚すなど、自分からアイデアを出しましたね。

——最初は嫌な人に見えながら、澄子は優しい女性だとやがてわかってきますよね。

敷島や典子、明子に対して、自分の経験や状況を踏まえて、彼らへ愛情を向けていくんです。特に明子に対しては、彼女の存在があったから、子どもを失ったことなどの気持ちを、少しずつ整理できるようになっていったんだと思います。

——明子を預かる場面もありますね。

赤ちゃん時代の明子と一緒のシーンもありましたから、いかに彼女とうまくやっていくかは気を遣いました。私自身も母親ですし、以前朝ドラ「まんぷく」をやった時にも、ちびっ子たちと接する機会が多かったので、ここは頑張りポイントだなと。ですから赤ん坊の明子が泣き出しても、他の人に任せず、何とか自分で泣き止ませようとか、撮影上どう映れば一番いい状態なのかも意識しながらやっていましたね。

——出演したシーン以外も現場でご覧になりましたか？

並行して是枝裕和監督の『怪物』を、長野県で撮影していたんです。そうしたら長野で「巨大生物對策説明会」の場面を撮ると聞いて、見学に行きました。



特設掃海艇「新生丸」艇長。

佐々木蔵之介
秋津清治

PROFILE｜1968年生まれ、京都府出身。大学在学中から劇団「惑星ピスタチオ」で看板俳優として活躍。2000年、NHK連続テレビ小説「オードリー」で注目される。以降、TVドラマ、映画、舞台と幅広く活躍。15年、『超高速！参勤交代』(14)で第38回日本アカデミー賞優秀主演男優賞を受賞。近年の映画出演作に、『嘘八百　なにわ夢の陣』『シャイロックの子供たち』(23)、『映画　マイホームヒーロー』(24年春公開予定)などがある。

INTERVIEW

家族や仲間を戦争で失ってきた男なんだろうなと。だからこそ敷島と典子のことを我が事のように思っている。

――ゴジラ映画への出演オファーが来た時の感想は？

ゴジラ映画は、もちろん何本かは観ていますけれど、自分がそれに出るとは考えたことがなかったですね。ただ、東宝スタジオへ行くたびに、入り口にあるゴジラの銅像を必ず見ていますから、彼と共演するのはどういう感じなんだろうと興味を持ちました。それと、山崎組には初参加でしたので、大変そうだけれども、やりがいのある現場に呼んでいただけたなと。その二つにすごく惹かれて、お引き受けしました。

――演じた秋津は「新生丸」のリーダーで、戦争を生き残ってきた男ですね。

家族や仲間を戦争で失ってきた男なんだろうなと。だからこそ敷島と典子のことを我が事のように思うし、“小僧”と呼ぶ水島のことも、部下を失ってきた経験があるからこそ大事に思っている。後半で水島を対ゴジラ作戦に参加させないと秋津は言いますけれど、それは一番身近にいて成長を喜んでいた水島に対して、お前が戦争を経験していないのは幸せなことなんだと。だからお前は余計な戦闘に出向いて心に傷を作る必要はない。未来ある命を、水島にはちゃんと生きていってほしいという想いが秋津にはあったんだと思いますね。

――「新生丸」の海上シーンは、撮影時に悪天候が多くて大変だったようですね。

その日の空模様、風の強さ、波の高さによって出航できるかどうかが決まるんです。支度部屋で待機していて、天気はいいのに風が強くて出航できないこともありました。出航しても海が荒れていて、丁度いい状況になることは何度もない。だから撮影現場に着いたら、すぐ本番を回すと言われて、焦ったこともありました。我々はゴジラと戦っているんですけれど、天候とも戦っていて、自然の方がゴジラより強いぞと感じました。波で船が揺れて、僕は船の一番高い部分に乗っていましたから特に揺れがひどくて、いっぺんダウンしかけた時があった。メイクさんが倒れてメイクなしで撮影したこともあります。僕らの船と監督船、撮影船、救助船で海に出るんですが、僕らが演技していて、ふと監督船の方を見ると、監督がダウンしているんです。監督は撮る時だけ何とか起きて、「OK」を出すとまたダウンするという感じでした。他にも何人かバタバタ倒れていきましたから、そんな経験をしたおかげでみんな戦友になれましたね。

――そういう撮影を乗り越えたからか、対ゴジラ作戦について「新生丸」の4人が居酒屋で話す場面は、和やかな雰囲気が出ていましたね。

あそこは大事な場面だと思いました。野田が考えた作戦が穴だらけだというのは、おそらく観客も感じていると思うんです。だからこそ劇中の人間が、「こんな作戦で大丈夫か？」とツッコんでおくことが必要だと思いました。それもここでは、お客さんに笑ってもらわなくてはいけないと思ったんです。この映画をエンタメとして良く見せるには、感情はリアリティで芝居を作るけれども、ゴジラを取り巻く非現実的な設定に関しては、どうすれば観客を作品世界に引き入れることができるかを考えなくてはいけないと感じました。だから僕は明るめにガンガンツッコんで、話し合いを進めていった方がいいと思ったんです。

――初めて組んだ山崎監督の印象は？

自分で脚本を書いているのに、監督は「そんなバカな」という風に、自分の本にツッコみながらやってらっしゃるんですよ。あの「新生丸」でゴジラに立ち向かうなんて、本当ならあり得ませんからね。それでいて現場がテンパるということはまずなくて、あれだけ大変なことをやっているのに、穏やかで楽しい現場でした。

――完成した映画をご覧になった感想は？

初号試写を観終わった時、席から立てませんでしたね。すごいものを観たという感覚がありました。エンタメとして面白かったし、人間ドラマとしても重厚で、何かいろんなことが重く響きました。怖いゴジラも良かったですし、世界に発信することを見据えた、凄いゴジラ映画ができたなと思います。

飯田基祐 板垣昭夫
東洋バルーン係長



PROFILE｜1966年生まれ、東京都出身。90年から8年間劇団方南ぐみに参加。舞台、映画、TVドラマで幅広く活躍する。主な映画出演作に、映画『ALWAYS　三丁目の夕日』シリーズ(05・07・12)、『THE 有頂天ホテル』(06)、『カノジョは嘘を愛しすぎてる』『永遠の0』(13)、『白ゆき姫殺人事件』(14)、『海賊とよばれた男』(16)、『山歌』『ゴーストブック　おばけずかん』(22)などがある。

COMMENT

自分がゴジラ映画に出演できるなんて、本当に夢のようでした。演じた板垣役は、最初はデパートの上に浮かぶ宣伝用の気球を作る町工場の親父さん、くらいにしか思っていませんでしたが、我々のバルーンでゴジラを浮上させるという、とんでもない作戦内容を知り、演技に臨むにあたってかなり気合を入れ直しました。実際、旧海軍機には浮泛(ふはん)装置という、海に沈まないためのバルーン装置が搭載されていたものもあったようで、かなりしっかりとした企業であることがわかりました。帽子と作業服に刺繍された会社名・東洋バルーンのロゴは、かなりかっこいいんですよ(笑)。そこも是非見てほしいです。

「巨大生物對策説明会」の場面には、それぞれの立場の人たちがいて、自分の判断で、作戦に参加するかどうかを決断しなくてはならない。それに対して、誰も止められないし、その人の決断を受け入れるしかない。現場には多くの人がいましたが、ひとりひとりの孤独感と寂しさを感じて演じていました。東洋バルーンのメンバーは、ゴジラと戦う現場まで行くことを志願するんですが、そこには自分の仕事に対するプライド、役割を全うしたいという想いがあったと思います。あのシーンを撮影する前に、メンバーそれぞれにどうしたいか聞いてみたんですが、「成果を見届けたい！」という気持ちはみんな同じでした。あのシーン以降、東洋バルーンとしての結束力が高まったと思います。

田中美央 堀田辰雄
駆逐艦「雪風」元艦長



PROFILE｜1974年生まれ、兵庫県出身。大阪芸術大学舞台芸術学部卒業後、劇団俳優座研究所を経て劇団俳優座に在籍。2022年2月に退団。舞台のほか映画、TVドラマ、声優やナレーターとしてマルチに活動する。主な映画出演作に、『海賊とよばれた男』(16)、『関ヶ原』(17)、『検察側の罪人』(18)、『無頼』(20)、『大河への道』『ヘルドッグス』(22)、『キングダム 運命の炎』(23)などがある。

COMMENT

出演の御依頼を受けた時、喜びとともにとてつもないプレッシャーを感じました。駆逐艦「雪風」の元艦長・堀田を演じるにあたって、歴代の「雪風」艦長について書かれた文献や資料を基に、勇猛果敢な上官の側面と、民間企業に勤める部下想いの柔らかい上司の一面を併せ持つ人物を目指しました。また横須賀港にある記念艦「三笠」に何度も通い、駆逐艦のスケール感のイメージを膨らませましたね。脚本の読み合わせの時、山崎監督から「もっと文系の艦長でお願いします」という指示をいただきました。元軍人を意識するあまり、熱弁を振るう演技になっていたのですが、堀田はあくまで民間人としてゴジラに立ち向かう、揺れる気持ちを持った人物として演じてほしいという指示だったと思います。

ゴジラと戦う場面は、自分があのゴジラと今、戦っているのだという実感と高揚感がありました。時にはクレーンで十数メートルの高さに船のデッキ部を持ち上げての撮影もあり、緊張感は半端なものではありませんでした。撮影中は、「雪風」の搭乗員全員とできるだけ同じ時間を過ごすようにしていました。狭い艦橋で過ごすうちに不思議な連帯感が生まれていきましたね。これほど不利な状況で戦うゴジラ映画はなかったと思います。武器や弾薬もない状況で、いかにしてゴジラと戦うか？　初代ゴジラを彷彿とさせるカットも多いので、幅広いファンの方に楽しんでいただけると思っています。



監督・脚本・VFX

山崎 貴

INTERVIEW 1

**自分たちでやれることに
制約があって、
兵器もない民間人が
どうやって戦うかを描くことで、
"今"の映画が生まれると
思いました。**

―― ゴジラ映画の監督をオファーされた時の感想は？

いつか何かのタイミングでゴジラ映画の依頼はくると思っていましたが、まさか『シン・ゴジラ』の次にくるとは。『シン・ゴジラ』は大好きなんです。でもよく出来過ぎているので、今回の劇中に「誰かが貧乏くじ引かなきゃいけねえんだよ」というセリフがありますけれど、ややそういう気持ちがある一方で、『シン・ゴジラ』のようないいものを観ると、自分もゴジラ映画を作ってみたいという気持ちが高まってくる。その勢いに乗って、監督をやろうと決めました。

―― 山崎監督が最初に観たゴジラ映画は？

子どもの頃、野球中継が雨で中止になると、TVでは"雨傘番組"として代わりに東宝の怪獣映画をよく放送していたんです。その時、初めて第1作の『ゴジラ』を観ました。当時の怪獣ものは「ウルトラマン」シリーズとか、もう少し怖くないものが多かった。でも『ゴジラ』を観て、自分が本当に殺されるんじゃないかと思ったんです。それでゴジラは怖いというイメージが刷り込まれました。その原体験もあって、第1作は僕の中で燦然と輝く映画なんです。ゴジラは核兵器によって生まれたもので、戦争というものが怪獣の形をして襲い掛かってくる。そのイメージが強くあるので、自分がゴジラ映画を作るなら、その方向性でやりたいと思いました。

―― 時代設定としては第二次世界大戦終了後の混乱期で、日本が軍事力を持っていない時代になっていますね。

一番来るとまずい時期にゴジラがやって来る。そこで人々がどうふるまうのかというのが、映画的だと思ったんです。残存艦隊も引き上げ船に使われているし、駆逐艦も大砲を撤去されたものしかない。戦う手段がわずかしかないところで、人はどうやって巨大な敵と戦うのかが観てみたかった。それとこの時代にしたのは、重巡洋艦「高雄」を出したかったからです。僕の中では、「大和」、「零戦」、「赤城」の次に映像化したかったのが「高雄」なんですよ。実際に「高雄」が自沈処理された時期を調べると、少し嘘つくにしてもギリギリこの辺りしかないと思って時代を設定しました。

―― しかも、民間人だけでゴジラに立ち向かうというのが異色ですね。

ゴジラにまつわるポリティカル・アクションには『シン・ゴジラ』があるので、同じことをやってもしょうがない。それと新型コロナウイルスの流行以降、政府がうまく機能していない感じがして、「俺たちで何とかするしかない」という意識が強くなった気もするんです。そこは現代ともリンクする感覚だと思います。自分たちでやれることに制約があって、兵器もない民間人がどうやって戦うかを描くことで、"今"の映画が生まれると思いました。

――敷島と典子のドラマがメインですね。

怪獣など大きな存在が出てくる映画では、人間の物語と怪獣の物語が乖離してしまうケースがあります。人間と怪獣の物語を融合させるには、感情面でゴジラにものすごく復讐心を抱く人間を生み出す必要があった。それで今の物語になったんですが、日本の高度成長期を描いた『ALWAYS　三丁目の夕日』シリーズの時代とは違う、戦後の焼け跡の時代を生きた人たちの話を前からやってみたかったんです。すべてを失った人たちが、人と触れ合っているうちに新たな人生を見つけていくという物語を作りたかった。その前々から思っていたアイデアを、このゴジラ映画ならくっつけてやれると思ったんです。ここではやっと出来上がろうとしていた幸せを、敷島はゴジラに粉砕されるんですけれども。彼が他人の女性や子どもと一緒に暮らし始めるというのは、藤沢周平の長屋ものの小説が発想の原点になっていますね。

――「新生丸」の面々も個性的ですね。

この当時ゴジラと戦える可能性がある人は誰かと調べてみると、機雷処理班なら機雷を持っているからやれるかもしれないと。しかも彼らは木造船で作業していて、小さなぼろい船でゴジラから必死に逃げるというイメージがあったので、これはいいと思いました。ぼろい船で戦うのは、「宮崎駿の雑想ノート」に収録されていた「最貧前線」のことも頭にあったんです。あの作品では漁船を改造した船で米軍の爆撃機と戦うんですが、その貧乏くさい「最貧前線」的な枠組みの中で、ゴジラと戦うにはどうすればいいかと考えました。

――使える兵器は限られていますが、終盤には「震電」という戦闘機が出てきますね。

「高雄」と同じくらい、「震電」は映像化したかったんです。第二次世界大戦末期にはまだ試作機で、戦闘で活躍したことはない。いまだに一度も実写で映像化されたことがないのでやってみたくて、「震電」を設計した方の息子さんにも会いに行きました。お話を伺うと、設計者であるその方の父親が、テストパイロットも務めて初飛行しているんですよ。逆に言えば、危なすぎて誰も乗ってくれなかったんじゃないかと。実戦配備するにはまだ問題が山積みだった機体らしいですが、どうしてもここには出したかったんです。

――主人公の敷島を、特攻に向かうはずだった戦闘機乗りにしたわけは？

敷島のキャラクターには、二つの考え方がありました。冒頭の大戸島の場面で、一つは橘が「(呉爾羅を)撃つな」と言ったのに、敷島が「俺がやってやりますよ」と言って撃つことで、整備兵たちが死んでしまう。もう一つは今の形で、橘が「撃て」と言ったのに、敷島は撃てない。その二つを考えていた時に、神木君が敷島をやってくれそうだということになって、これは撃てない奴にした方がいいなと。彼はそういう演技も上手いですからね。その体験によって絶望を味わった人間が、戦後に典子や明子と出会うことで再び生きようと覚醒していく。でもその希望は、典子を奪われることで断ち切られる。そんな展開はどうだろうと。

――その敷島と典子に、神木隆之介さんと浜辺美波さんをキャスティングしたわけは？

二人は昭和の世界に似合うと思ったんです。神木君は顔の作りが超現代的というのではなく、古い時代も似合う。浜辺さんも昭和の女優が持っていた魅力を、いまだに持っている人だと感じるんです。彼女には往年の東宝の女優が持つ匂いみたいなものがあって、これは俳優としての財産だと思いますね。

――今回の作品においてゴジラをどういう存在として描きましたか？

『ALWAYS　続・三丁目の夕日』で冒頭にゴジラを出す時や、「ゴジラ・ザ・ライド　大怪獣頂上決戦」の映像を作る時に、自分の中では「ゴジラって何だろう？」という問いかけはしていたんです。僕の中では神様と生物の両方を兼ね備えた存在というイメージがありました。ゴジラは神様のようなこともするけれど、決して単なる神様ではなくて、動物的な野獣としての属性も持ちながら、その両方で揺らめいている存在だと思います。映画を作り終えて改めて感じたのは「ゴジラ映画」を作るということは神事に近いのかなという感覚です。映画という形で「ゴジラ」という荒神を鎮めるための「神楽」を舞う。ゴジラ映画とはそういうものなんだと改めて思うようになりました。

1964年生まれ、長野県出身。幼少期に『スター・ウォーズ』(77)や『未知との遭遇』(77)と出会い、強く影響を受け、特撮の道に進むことを決意。86年、株式会社白組に入社。『大病人』(93)、『静かな生活』(95)など、伊丹十三監督作品にてSFXやデジタル合成などを担当。2000年『ジュブナイル』で映画監督デビュー。『ALWAYS　三丁目の夕日』(05)では、心温まる人情や活気、空気感を持つ昭和の街並みをVFXで表現し話題になり、第29回日本アカデミー賞最優秀監督賞・脚本賞など計12部門で最優秀賞を受賞。13年の『永遠の0』は、2014年年間邦画興行収入NO. 1のメガヒットとなった。その他の作品に、『STAND BY ME ドラえもん』シリーズ(14・20)、『アルキメデスの大戦』『ルパン三世 THE FIRST』(19)、『ゴーストブック　おばけずかん』(22)などがある。CGによる高度なビジュアルを駆使した映像表現・VFXの第一人者。

『ゴジラ』映画史

1954年の第1作『ゴジラ』を皮切りに、これまで29作品(日本版・実写映画)が製作された。2024年に70周年を迎える『ゴジラ』シリーズの歴史を、一挙に振り返ってみよう!

(解説:竹之内 円)



1.『ゴジラ』

1954年
11月3日公開

製作:田中友幸
監督:本多猪四郎
特殊技術:円谷英二、向井 宏、渡辺 明、岸田九一郎
脚本:村田武雄、本多猪四郎
音楽:伊福部 昭
出演:宝田 明、河内桃子、平田昭彦、志村 喬、堺左千夫
97分/モノクロ/スタンダード

第二次世界大戦、そしてビキニ環礁での核実験で被爆した第五福竜丸の悲劇を受け、水爆実験で目覚めた怪獣ゴジラを核や戦争のメタファーとして描いた日本初の本格怪獣映画。大戸島の伝説にある怪獣ゴジラが品川から東京に上陸し、帝都を火の海にする。戦争を経験した本多猪四郎監督の反戦、反核の思いを込めた重厚な怪獣映画。製作費は当時としては破格の1億円が投じられた超大作で、観客動員964万人、興収1.6億円の記録的ヒットとなった。また世界各国でも上映されて大ヒットし、スーツ(着ぐるみ)アクター(手塚勝巳・中島春雄)の演技による怪獣と精巧なミニチュアを使った円谷英二の特撮は、世界中の映画関係者に衝撃と影響を与えた。まさに怪獣映画の原点にして頂点。

2.『ゴジラの逆襲』



1955年
4月24日公開

製作:田中友幸
監督:小田基義
特技監督:円谷英二
脚本:村田武雄、日高繁明
音楽:佐藤 勝
出演:小泉 博、千秋 実、志村 喬、若山セツ子、木匠マユリ
82分/モノクロ/スタンダード

『ゴジラ』の大ヒットを受けて作られた続編。前作のラストで山根博士が言った「あれが最後のゴジラとは思えない」が現実となった。本作では大阪にゴジラが上陸し、初の敵怪獣アンギラスと激突する。通常、怪獣は巨大感を出すためハイスピード(スローモーション)で撮影されるが、冒頭のゴジラとアンギラスの戦いはカメラの撮影スピードの設定を間違えて早送りのような映像となった。だが円谷英二特技監督は「生物感があって面白い」と採用し、効果をあげた。

3.『キングコング対ゴジラ』



1962年
8月11日公開

製作:田中友幸
監督:本多猪四郎
特技監督:円谷英二
脚本:関沢新一
音楽:伊福部 昭
出演:高島忠夫、藤木 悠、有島一郎、浜 美枝、佐原健二
97分/カラー/シネマスコープ(東宝スコープ)

7年ぶりの復活作は、東宝創立30周年記念映画として初のカラー、そしてワイド画面のシネマスコープとなり、ハリウッドの怪獣映画の原点『キング・コング』(33)からキングコングを借り受けて実現した日米怪獣タイトルマッチとなった。またも日本に現れたゴジラの進撃を阻止するため、製薬会社の宣伝のためにファロ島から連れてきたキングコングを戦わせる。ゴジラに、当時、東宝の人気シリーズだったサラリーマン喜劇の要素を加えた娯楽超大作で、観客動員1120万人というゴジラシリーズ最大のヒット作となった。

4.『モスラ対ゴジラ』



1964年
4月29日公開

製作:田中友幸
監督:本多猪四郎
特技監督:円谷英二
脚本:関沢新一
音楽:伊福部 昭
出演:宝田 明、星 由里子、小泉 博、ザ・ピーナッツ、佐原健二
89分/カラー/シネマスコープ(東宝スコープ)

今作では1961年の大ヒット作『モスラ』に登場したモスラがゴジラと対決。大型台風で流れ着いた巨大な卵はモスラの卵で、干拓地から出現したゴジラが名古屋に現れる。女性的な美しさと優しさを持つモスラに襲いかかる、凶暴なゴジラの悪役ぶりが楽しめる。肉弾戦のいわゆる"怪獣プロレス"のキングコング戦とは違い、空を舞う成虫モスラと地面を這う幼虫モスラという、空と地の立体的な戦いを見せる。本作から人気シリーズとして、ゴジラ映画は以後、(1970年を除き)1975年まで毎年作られるようになった。

5.『三大怪獣 地球最大の決戦』



1964年
12月20日公開

製作:田中友幸
監督:本多猪四郎
特技監督:円谷英二
脚本:関沢新一
音楽:伊福部 昭
出演:夏木陽介、星 由里子、若林映子、志村 喬、ザ・ピーナッツ
93分/カラー/シネマスコープ(東宝スコープ)

流星群が降りそそぐ日本に、金星人を名乗る美女が宇宙超怪獣キングギドラの襲来を予言する……。ゴジラの最大にして最強の敵キングギドラの初登場作。三つの首、二本の尾、大きな翼を持つキングギドラはスタッフ10人がかりで操演されたといわれる。モスラの説得により、ゴジラとラドンが地球のためにキングギドラと戦うことになり、ゴジラは本作から人類の味方となった。また当時ヒットしていた『007』シリーズの人気もあってか、本作にはスパイ映画の要素も盛り込まれ、さらに女王と彼女を守る刑事の関係性に『ローマの休日』(50)の雰囲気も意図的に導入している。

6.『怪獣大戦争』



1965年
12月19日公開

製作:田中友幸
監督:本多猪四郎
特技監督:円谷英二
脚本:関沢新一
音楽:伊福部 昭
出演:宝田 明、ニック・アダムス、水野久美、久保 明、土屋嘉男
94分/カラー/シネマスコープ

『地球防衛軍』(57)や『宇宙大戦争』(59)など東宝特撮の人気SFシリーズの要素も盛り込まれ、近未来(※劇中では196X年)を舞台にしたゴジラ映画。キングギドラ撃退のためにゴジラとラドンを貸してほしいと申し出るX星人だったが、それは地球侵略の罠だった……。X星でのゴジラ、ラドンとキングギドラの戦い、円盤による攻撃やのちにメーサー殺獣光線車に改造されるAサイクル光線車など、ド派手な怪獣バトルが楽しめる。水野久美演じる妖艶なX星人・波川女史に魅了された少年ファンも多かった。

7.『ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決闘』



1966年
12月17日公開

製作:田中友幸
監督:福田 純
特技監督:円谷英二
脚本:関沢新一
音楽:佐藤 勝
出演:宝田 明、水野久美、砂塚秀夫、平田昭彦、ペア・バンビ
87分/カラー/シネマスコープ

太平洋横断用ヨットに無断で乗り込んだ若者たちが流れ着いたのは、世界征服を狙う秘密結社"赤イ竹"の島だった……。監督が『若大将』シリーズ(61〜71)や『100発100中』(65)などアクションや青春映画を得意とした福田純に代わり、若者らが主役のアクション映画となった。ゴジラが若大将=加山雄三のマネも披露。新怪獣エビラは初の水棲怪獣で、丸まった海老をサソリのように逆に反らせたデザインがユニーク。水中でのゴジラとの戦いも見どころ。

8.『怪獣島の決戦 ゴジラの息子』



1967年
12月16日公開

製作:田中友幸
監督:福田 純
特技監修:円谷英二
特技監督:有川貞昌
脚本:関沢新一、斯波一絵
音楽:佐藤 勝
出演:高島忠夫、前田美波里、久保 明、平田昭彦、佐原健二
86分/カラー/シネマスコープ

特撮ヒーロー番組人気で第一次怪獣ブームが起き、ゴジラをより子どもに親しんでもらおうと、子どもたちと同じ目線となるゴジラの息子ミニラを登場させた。前作に引き続き南洋の孤島が舞台となっていて、一部はグアムでロケ撮影が行なわれた。ゴジラの卵を、異常気象で巨大化した怪獣カマキラスやクモンガが狙う。この新怪獣たちは、実在の昆虫を巨大化したようなリアル志向のデザインで、人間が入らず、ワイヤーで吊って操演するため撮影は難航したという。南の島で雪に埋もれていくゴジラ親子は、シリーズ屈指の余韻を残す名シーン。

9.『怪獣総進撃』



1968年
8月1日公開

製作:田中友幸
監督:本多猪四郎
特技監修:円谷英二
特技監督:有川貞昌
脚本:馬淵 薫、本多猪四郎
音楽:伊福部 昭
出演:久保 明、小林夕岐子、愛 京子、佐原健二、土屋嘉男
89分/カラー/シネマスコープ

第一次怪獣ブームも落ち着き、前作の興行成績も芳しくなかったため当時最後の集大成として企画され、ゴジラと初共演の怪獣も含む11体が登場する。怪獣もニューヨークやパリ、モスクワなど世界各地に現れたが決戦の地は富士山麗で、終盤の11大怪獣が勢揃いした画は壮観。当初の仮題は『怪獣忠臣蔵』であり、敵のキラアク星人も「忠臣蔵」の"吉良"上野介と"悪"を合わせたもの。本作は予想を超える大ヒットとなり、ゴジラシリーズは継続されることになった。

10.『ゴジラ・ミニラ・ガバラ オール怪獣大進撃』



1969年
12月20日公開

製作:田中友幸
監督:本多猪四郎
特技監修:円谷英二
脚本:関沢新一
音楽:宮内国郎
出演:佐原健二、中 真千子、矢崎知紀、天本英世、堺左千夫
70分/カラー/シネマスコープ

ゴジラ映画の中で唯一、怪獣がいない現実世界を舞台とした作品で、怪獣は主人公である一郎少年の空想として登場する。前作に次ぐ9体の怪獣が登場するが、ゴジラ、ミニラ、ガバラ、カマキラス以外は過去作映像の流用ということもあり、公開当時の評価はいまひとつだった。だが、現在では、"鍵っ子"など当時の社会問題を描いていることや、小さい体でいじめっ子怪獣のガバラに立ち向かうミニラと自分を重ねた少年の成長ファンタジーとして再評価されている。

11.『ゴジラ対ヘドラ』



1971年
7月24日公開

製作:田中友幸
監督:坂野義光
特殊技術:中野昭慶
脚本:馬淵 薫、坂野義光
音楽:真鍋理一郎
出演:山内 明、柴本俊夫、川瀬裕之、木村俊恵、麻里圭子
85分/カラー/シネマスコープ

社会問題となっていた公害をヘドラという怪獣で見せた社会派の問題作。グロテスクなヘドラやサイケな美術、ゴジラが空を飛ぶ奇想天外な演出もあり、公開時の評価は芳しくなかった。現在ではダークで異色のゴジラとしてカルト的な人気を誇っている。坂野義光監督によるゴジラは本作のみだが、後年ハリウッド版『GODZILLA ゴジラ』(16)の企画とエグゼクティブ・プロデューサーも務めた。

12.『地球攻撃命令 ゴジラ対ガイガン』



1972年
3月12日公開

製作:田中友幸
監督:福田 純
特殊技術:中野昭慶
脚本:関沢新一
音楽:伊福部 昭
出演:石川 博、菱見百合子、梅田智子、西沢利明、高島 稔、藤田 漸
89分/カラー/シネマスコープ

特撮テレビ番組の人気も手伝って第二次怪獣ブームが起こり、ゴジラも悪い怪獣と戦うヒーローを目指すことになる。絶対の平和を掲げる世界子供ランドだが、実はゴジラたちを抹殺し地球を狙う宇宙人の基地だった。ゴジラはアンギラス、ガイガンはキングギドラとタッグマッチで戦う。ゴジラ、ガイガン、キングギドラは東宝製作の特撮ヒーロー番組「流星人間ゾーン」(73)にもゲスト出演して子どもたちを喜ばせ、ゴジラも正義のヒーローの仲間入りを果たした。

13.『ゴジラ対メガロ』



1973年
3月17日公開

製作:田中友幸
監督・脚本:福田 純
特殊技術:中野昭慶
音楽:眞鍋理一郎
出演:佐々木勝彦、林 ゆたか、川瀬裕之、森 幹太、富田浩太郎
82分/カラー/シネマスコープ

テレビで人気のロボット・アニメの影響もあり、ゴジラシリーズ初のロボット・キャラクター"ジェットジャガー"が登場する。物語は人類による、度重なる地下核実験に怒った海底王国シートピアがメガロとガイガンを使って人類に報復するというもので、反核を訴える内容となっている。この頃は予算も厳しくなっていたが、メガロのダム破壊は巨大なオープンセットが組まれ大迫力のシーンを実現している。

ゴジラ造形の歴史



『ゴジラ』(1954)

『ゴジラの逆襲』(1955)





『キングコング対ゴジラ』(1962)



『モスラ対ゴジラ』(1964)



『三大怪獣 地球最大の決戦』(1964)



『怪獣大戦争』(1965)



『ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決闘』(1966)



『怪獣島の決戦 ゴジラの息子』(1967)



『怪獣総進撃』(1968)

昭和ゴジラシリーズ (1954~1975)

第1作の『ゴジラ』(54)は水爆によって呼び覚まされた古代生物という設定で、皮膚と大きな背びれを持ち、表情のない目で、耳があるのが特徴。ゴジラのスーツ(かつてはぬいぐるみ、着ぐるみと呼ばれた)は2体作られた。1号が重すぎて動けなかったため、撮影の多くは軽量な2号が使われた。1号は上下に分割され、上半身は隅田川を南下するシーンで、下半身は建物を踏み潰すアップなどに使われた。 第1作からわずか半年での公開となった『ゴジラの逆襲』(55)のスーツは、かなり急ピッチでの製作だったという。特徴としては両目が正面寄りにあり、大きめの耳、歯並びの悪い口で、体形としてはやや細身となった。放射熱線を吐く時背びれが光らないゴジラでもある。『キングコング対ゴジラ』(62)はキングコングが逆三角形の体形だからか、対照的にゴジラは三角形の安定感のある体形となり、耳がなくなり、生物的にはあり得ない巨大な目玉と太い足が特徴。横から見ると口が大きく裂けており、凶暴な顔つきだ。さらに凶悪な顔つきとなるのが『モスラ対ゴジラ』(64)。三白眼の睨みつけるような顔で、頭部の造形素材が柔らかいゴムに変わったことにより、歩くと頬が揺れる。本作以降、ゴジラの顔は本作の石膏原型を基に顔が作られることとなり、『怪獣島の決戦 ゴジラの息子』(67)を除き『地球攻撃命令 ゴジラ対ガイガン』(72)まで8作品で使われ、多くの人がイメージするゴジラの顔となった。『三大怪獣 地球最大の決戦』(64)では三白眼だった目が修正されたため違う顔に見えるが、前作のスーツを改造して使用している。『怪獣大戦争』(65)では、頭部は先ほど述べた型を使用して新規造形し、身体も新規造形で、腰周りが太く尻尾が短くなっている。『ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決闘』(66)では陸上スーツが『怪獣大戦争』、水中バトルでは『三大怪獣 地球最大の決戦』のスーツが流用された。ミニラが登場する『怪獣島の決戦 ゴジラの息子』はこれまでに比べ柔和な顔つきとなり、ミニラと比べて大きく見せるため、頭部上部が大きめに作られている。『怪獣総進撃』(68)でもスーツは新造され、顔は『モスラ対ゴジラ』の原型修正版が使われた。このスーツは『地球攻撃命令 ゴジラ対ガイガン』まで4作品で使われることになる。作品によって顔つきが違って見えるのは、経年劣化による修復や色を塗り直したため。『ゴジラ対メガロ』(73)ではスーツアクターの交代によりスーツが完全新造され、大きい目が特徴。『ゴジラ対メカゴジラ』(74)にも流用されたが、背びれの並びが違っている。『メカゴジラの逆襲』(75)も同じスーツの流用だが、目つきが鋭く修正された。ここではスーツを中心に解説したが、ゴジラ映画ではシーンによってギニョール(ハンドパペット)やミニチュア、ラジコン、ストップ・モーション・アニメ用のゴジラが作られ、使われている。



『ゴジラ・ミニラ・ガバラ オール怪獣大進撃』(1969)



『ゴジラ対ヘドラ』(1971)



『地球攻撃命令 ゴジラ対ガイガン』(1972)



『ゴジラ対メガロ』(1973)



『ゴジラ対メカゴジラ』(1974)



『メカゴジラの逆襲』(1975)

平成・VSゴジラシリーズ (1984～1995)

平成・VSゴジラシリーズのゴジラは第1作同様に恐怖の対象として現れた。復活作である1984年の『ゴジラ』では身長も建造物の高層化に伴い80mに変更され、スーツとサイボットの2種類が使われた。スーツは『ゴジラ』(54)に回帰した顔つきだが、三白眼の鋭い目と犬歯が牙のように見えるのが特徴。身長4.8mの機械仕掛けのサイボットはスーツとは別進行で作られ、主にアップ用として使用された。『ゴジラVSビオランテ』(89)ではスーツも新造された。小さめの頭で白目がわからないのが特徴。この原型は以降の平成・VSゴジラシリーズ全作に使用されることになるが、表皮の付け方や塗装、内蔵されるメカによって違いが生まれている。『ゴジラVSキングギドラ』(91)では設定身長はさらに大きく、100mとなる。前作のスーツ2体が修復されて使われ、白目がわかるようになった。前半の北海道に現れたゴジラはより凶暴な顔つきに改造されている。『ゴジラVSモスラ』(92)ではメインスーツが新造され、空を飛ぶモスラが相手のため上を向くメカが内蔵されている。『ゴジラVSメカゴジラ』(93)でもスーツが新造され、頭部は表皮の付け方などを変えることで違う表情となっている。身体は腰の位置が高くなり、足が長めになっている。スーツは『ゴジラVSスペースゴジラ』(94)でも新造され、首が上下左右に動くメカを内蔵した。リトルゴジラとの対比のため、平成・VSゴジラシリーズ最大のスーツとなった。平成・VSゴジラシリーズ完結編『ゴジラVSデストロイア』(95)ではゴジラがメルトダウンを起こして発光しているため、前作のスーツを改造し860個の電球が仕込まれた。顔の特徴としてはメルトダウンの影響で目の虹彩もオレンジになっている。ラストに登場するゴジラジュニアが変貌したゴジラは、メルトダウンをしたゴジラのスーツを黒く塗ったものが使われた。



『ゴジラ』(1984)



『ゴジラVSモスラ』(1992)



『ゴジラVSビオランテ』(1989)



『ゴジラVSキングギドラ』(1991)

14.『ゴジラ対メカゴジラ』



1974年
3月21日公開

製作：田中友幸
監督：福田 純
特技監督：中野昭慶
脚本：福田 純、山浦弘靖
音楽：佐藤 勝
出演：大門正明、青山一也、田島令子、平田昭彦、ベルベラ・リーン
84分／カラー／シネマスコープ

ゴジラ誕生20周年記念の大作で、後半では国際海洋博覧会の開催を翌年に控えた沖縄で一大ロケが行なわれた。内容もスケールが大きく、ゴジラともう1体のゴジラ（正体はメカゴジラ）が戦うという夢の対決を見せてくれる。メカゴジラは全身が武器という最強の敵怪獣で、キングギドラと並んでその後もゴジラと戦うライバル怪獣となった。強すぎるメカゴジラを倒すため、沖縄の守り神シーサーも守護怪獣キングシーサーとしてゴジラを助ける。

15.『メカゴジラの逆襲』



1975年
3月15日公開

製作：田中友幸
監督：本多猪四郎
特技監督：中野昭慶
脚本：高山由紀子
音楽：伊福部 昭
出演：佐々木勝彦、平田昭彦、藍 とも子、睦 五郎、大門正明
83分／カラー／シネマスコープ

第15作にして昭和ゴジラ最終作。第1作から昭和ゴジラの名作を撮ってきた本多猪四郎監督が6年ぶりに復帰、自身最後のゴジラ映画（そして監督作）となった。伊福部昭作曲の「ゴジラのテーマ」も再び流れ、第1作でゴジラを倒した芹沢博士を演じた平田昭彦に社会を憎みメカゴジラを再生させる狂気の博士を演じさせるなど第1作のアンチテーゼであり、原点回帰を目指した野心作でもある。ラストの夕陽の海を去っていくゴジラが美しくも切ない。

16.『ゴジラ』



1984年
12月15日公開

製作：田中友幸
監督：橋本幸治
特技監督：中野昭慶
脚本：永原秀一
音楽：小六禮次郎
出演：小林桂樹、田中 健、沢口靖子、宅麻 伸、夏木陽介
103分／カラー／ビスタ

ゴジラ誕生30周年を記念して9年ぶりに作られた復活作。第1作を原典として30年ぶりに日本へ現れた設定のリブート作。大黒島の噴火によりゴジラが目覚め、日本を襲う。アメリカとソ連は日本にゴジラへの戦術核兵器の使用を要請する……。第1作同様に大人向けとして制作され、米・ソと政府の駆け引きなど政治的な描写も多い。タイトルが第1作と同じため「84ゴジラ」とも呼ばれ、昭和59年公開だが、便宜上平成ゴジラ第1作とされる。

17.『ゴジラVSビオランテ』



1989年
12月16日公開

製作：田中友幸
監督・脚本：大森一樹
特技監督：川北紘一
音楽：すぎやまこういち
出演：三田村邦彦、田中好子、高嶋政伸、小高恵美、峰岸 徹
105分／カラー／ビスタ

平成初の対戦ものとなった本作のストーリーは、一般公募から選ばれた。時代を予見したようなバイオ・テクノロジーがテーマで、前作で残されたゴジラの体組織＝G細胞が平成ゴジラの物語の中心となっていく。G細胞の争奪戦が繰り広げられるなか、人間と薔薇の細胞にG細胞を組み合わせた怪獣ビオランテが現れ、ゴジラは呼び寄せられるかのように向かっていく。ゴジラに感応する能力を持つ三枝未希（小高恵美）も平成シリーズを通しての重要人物となる。

18.『ゴジラVSキングギドラ』



1991年
12月14日公開

製作：田中友幸
監督・脚本：大森一樹
特技監督：川北紘一
音楽監督：伊福部 昭
出演：中川安奈、豊原功補、西岡徳馬、小高恵美、原田貴和子
103分／カラー／ビスタ

東宝創立60周年の記念作品となった本作は、ゴジラの対戦怪獣として最大の敵であるキングギドラが選ばれた。ゴジラの被害を訴える23世紀からやってきた未来人は歴史を変えてゴジラが誕生しないようにしたが、代わりに現れたのはキングギドラ。しかしそれは未来人の罠だった。タイム・パラドックスやアンドロイドなど、当時の人気SF映画の影響やオマージュも散見できる。前作ではゴジラのテーマが流用された伊福部昭が音楽監督に復帰し、ファンを喜ばせた。

19.『ゴジラVSモスラ』



1992年
12月12日公開

製作：田中友幸
監督：大河原孝夫
特技監督：川北紘一
脚本：大森一樹
音楽監督：伊福部 昭
出演：別所哲也、小林聡美、村田雄浩、小高恵美、宝田 明
102分／カラー／ビスタ

復活ゴジラ第3の対戦相手は、ゴジラがなぜか勝てないモスラ。観光会社によってインファント島からモスラの卵が持ち出され、さらに“黒いモスラ”バトラ、そしてゴジラが日本を襲う。当初はモスラ主役の『モスラVSバガン』として企画されたが、『ゴジラVSキングギドラ』のヒットを受けてゴジラに変更された。ストーリーはモスラとバトラ寄りで、環境問題がテーマとなっている。また主人公が離婚した夫婦という、当時の時流も取り入れられている。

20.『ゴジラVSメカゴジラ』



1993年
12月11日公開

製作：田中友幸
監督：大河原孝夫
特技監督：川北紘一
脚本：三村 渉
音楽監督：伊福部 昭
出演：高嶋政宏、佐野量子、小高恵美、原田大二郎、宮川一朗太
108分／カラー／ビスタ

ゴジラ誕生40周年記念作の対戦相手はメカゴジラ。国連G対策センターはメカキングギドラに使われた23世紀の技術を応用し、対ゴジラ兵器としてメカゴジラを作り上げた。本作から平成ゴジラ・シリーズ後半の主軸となるゴジラの同種族であるベビーゴジラが登場。ゴジラが破壊するだけではない感情を持つ存在として描かれていく。そして永遠の名脇役ラドンも、中盤、より強力なファイヤーラドンとして復活しメカゴジラと戦う。

21.『ゴジラVS スペースゴジラ』



1994年
12月10日公開

製作：田中友幸
協同製作：富山省吾
監督：山下賢章
特技監督：川北紘一
脚本：柏原寛司
音楽：服部隆之
出演：橋爪 淳、小高恵美、米山善吉、中尾 彬、佐原健二
108分／カラー／ビスタ

平成・VSゴジラシリーズを一旦休止し、トライスター版『GODZILLA』を公開する予定だったが、製作が遅れたために急遽作られたのが本作。宇宙に飛散したビオランテのG細胞と結晶生命体が融合、異常進化して誕生したスペースゴジラが地球へ飛来する。新たな対G兵器M.O.G.E.R.A.も登場し、ベビーゴジラはリトルゴジラへ成長する。ゴジラはリトルゴジラを護るためスペースゴジラと戦う。

22.『ゴジラVSデストロイア』



1995年
12月9日公開

製作：田中友幸、富山省吾
監督：大河原孝夫
特技監督：川北紘一
脚本：大森一樹
音楽監督：伊福部 昭
出演：辰巳琢郎、石野陽子、林 泰文、大沢さやか、小高恵美
103分／カラー／ビスタ

平成・VSゴジラシリーズ完結編で、メルトダウンを起こしたゴジラの死が描かれる。核爆発寸前でバーニング状態となったゴジラが日本に現れた頃、1954年に最初のゴジラを倒したオキシジェン・デストロイヤーの影響で、古代生物が異常進化したデストロイアが誕生していた。第1作のヒロイン河内桃子の再登場を始め、第1作へのオマージュがちりばめられている。今シリーズのゴジラは番外編的な『ゴジラVSモスラ』を除き、常に自身の分身や身代わりと戦ってきたことになる。

23.『ゴジラ2000 ミレニアム』



1999年
12月11日公開

製作：富山省吾
監督：大河原孝夫
特殊技術：鈴木健二
脚本：柏原寛司、三村 渉
音楽：服部隆之
出演：村田雄浩、阿部 寛、西田尚美、鈴木麻由、佐野史郎
107分／カラー／シネマスコープ

4年ぶりのゴジラ第23作。本作からミレニアムゴジラシリーズと呼ばれ、1954年の第1作を原典としてリブートされた。太古の岩塊から現れたUFOはスーパーコンピューターに侵入しゴジラの情報を得て、ゴジラの復元・再生能力を持つ細胞を奪おうとする。情報化の時代への皮肉か、異星人ミレニアンは肉体を持たない高度な生命体。G細胞の力で肉体を得ようとするが、G細胞の制御ができず、怪獣“オルガ”となってしまった。

24.『ゴジラ×メガギラス G消滅作戦』



2000年
12月16日公開

製作：富山省吾
監督：手塚昌明
特殊技術：鈴木健二
脚本：柏原寛司、三村 渉
音楽：大島ミチル
出演：田中美里、谷原章介、勝村政信、伊武雅刀、星 由里子
105分／カラー／シネマスコープ

1954年のゴジラ上陸で東京が壊滅、首都が大阪に移転した日本が舞台のパラレルワールド作品。ゴジラは倒されておらず、特別G対策本部は新兵器ディメンション・タイドを開発するが、実験の失敗で太古の昆虫メガニューラが現代に現れ、巨大怪獣メガギラスに成長してしまう。女性の社会進出の流れを受けて、主人公の辻森桐子（田中美里）は対ゴジラ組織Gグラスパーの隊長という設定。クリーンエネルギー問題や開発に絡む政治家の汚職などリアルな描写も見られる。

25.『ゴジラ モスラ キングギドラ 大怪獣総攻撃』



2001年
12月15日公開

製作：富山省吾
監督：金子修介
特殊技術：神谷 誠
脚本：長谷川圭一、横谷昌宏、金子修介
音楽：大谷 幸
出演：新山千春、宇崎竜童、小林正寛、佐野史郎、天本英世
105分／カラー／シネマスコープ

本作も新たな設定で1954年のゴジラ上陸以来、怪獣が現れていない日本が舞台。静岡から上陸したゴジラ（呉爾羅）にバラゴン（婆羅護吽）、モスラ（最珠羅）、ギドラ（魏怒羅）の護国聖獣が立ち向かう。平成ガメラ3部作（95・96・99）を経て本作を監督した金子修介は、ゴジラを徹底的な恐怖の対象として描き、ゴジラに襲われた人の死を正面から描いた。これまでの設定を一新しキングギドラまで正義の怪獣にしたのも斬新だが、初期案の護国聖獣はバラゴン、バラン、アンギラスという通好みの三体だった。

26.『ゴジラ×メカゴジラ』



2002年
12月14日公開

製作：富山省吾
監督：手塚昌明
特殊技術：菊地雄一
脚本：三村 渉
音楽：大島ミチル
出演：釈 由美子、宅麻 伸、高杉 亘、友井雄亮、水野久美
88分／カラー／シネマスコープ

平成・VSゴジラシリーズに続いて、メカゴジラが人類側の対ゴジラ兵器として登場。日本政府は1954年のゴジラの骨格を基に生体ロボット“3式機龍”を完成させた。しかし機龍のテスト起動中にゴジラが現れ、ゴジラの声に反応して暴走してしまう。これまで動きに制約のあったロボット怪獣だが、CGや特撮技術の進歩で機龍はスピーディーな戦いを見せる。ミレニアムゴジラシリーズは女性の主人公が続いたが、現実に先駆けて女性総理大臣（水野久美）が登場した。

27.『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』



2003年
12月13日公開

製作：富山省吾
監督：手塚昌明
特殊技術：浅田英一
脚本：横谷昌宏、手塚昌明
音楽：大島ミチル
出演：金子 昇、吉岡美穂、虎牙光揮、長澤まさみ、大塚ちひろ
91分／カラー／シネマスコープ

これまで単独の世界観を持つミレニアムゴジラシリーズだったが、本作は『ゴジラ×メカゴジラ』の続編。同時に1961年公開の『モスラ』の続編でもあり、主演の小泉博が同じ中條信一役で出演している。中條の元へ42年ぶりに小美人が現れ、ゴジラの骨を海へ返すよう伝える。その直後、東京に上陸したゴジラにモスラが立ち向かっていく。本作でゴジラは初めて東京タワーを破壊する。物語終盤でまたも暴走する機龍。しかし、ラストは感動的なゴジラ映画となっている。

28.『ゴジラ FINAL WARS』



2004年
12月4日公開

製作：富山省吾
監督：北村龍平
特殊技術：浅田英一
脚本：三村 渉、桐山 勲
音楽：キース・エマーソン
出演：松岡昌宏、菊川 怜、ドン・フライ、水野真紀、北村一輝
125分／カラー／シネマスコープ

ゴジラ誕生50周年記念作であり、ミレニアムゴジラシリーズ最後の作品。ゴジラの集大成的作品として作られ、平成版『怪獣総進撃』を目指し、シリーズ最高15体の怪獣が登場した。地球に妖星ゴラスが衝突すると警告に来たX星人は、友好の証として世界各地に現れていた怪獣を消滅させるが、それはX星人の罠だった。ゴジラ作品だけでなく、過去の東宝特撮作品などのオマージュや引用がちりばめられている。オープニングタイトルは『セブン』（95）などのカイル・クーパーが編集し、音楽を世界的ロック・スターのキース・エマーソンが担当した。

29.『シン・ゴジラ』



2016年
7月29日公開

製作：市川 南
脚本・総監督：庵野秀明
監督・特技監督：樋口真嗣
音楽：鷺巣詩郎
出演：長谷川博己、竹野内豊、石原さとみ、高良健吾、市川実日子
119分／カラー／シネマスコープ

12年ぶりの復活作は「新世紀エヴァンゲリオン」（95～96）の庵野秀明が総監督し話題となった。これまで怪獣が現れなかった日本が舞台で、ゴジラを一種の災害として描いたシミュレーション映画。突如、羽田沖から出現したゴジラに政府は右往左往しながら対処しようとする。数々の災害を経験してきた日本でしか作れない映画で、フルCGによるゴジラの東京破壊シーンは圧巻。幅広い層に支持され、観客動員551万人、興収82.5億円の大ヒットとなった。



『ゴジラVSメカゴジラ』(1993)



『ゴジラVSスペースゴジラ』(1994)



『ゴジラVSデストロイア』(1995)

ミレニアムゴジラシリーズ (1999～2004)

1999年公開『ゴジラ2000 ミレニアム』のスーツは平成・VSゴジラシリーズとは違うフォルムを持つ新しいゴジラが作られた。身長の設定は55mに変更され、大きな口と稲妻のような鋭利で大きな背びれが特徴。『ゴジラ×メガギラス G消滅作戦』(00)のスーツは前作の型から新規に作られ、身体の色を明るめに変更。徹底した悪役として描かれた『ゴジラ モスラ キングギドラ 大怪獣総攻撃』(01)のゴジラは、新たにスーツが作られている。設定身長は前作よりやや大き目の60mに変更されたが、実際に作られたスーツは2m20cmというシリーズ最大級のもので、足元も厚底靴のようになっていたという。いかつい顔つきが特徴だが、白目だけの不気味な目が恐怖感を倍増させている。『ゴジラ×メカゴジラ』(02)と『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』(03)は、身体は『ゴジラ2000 ミレニアム』の原型の流用となり頭部が新規造形だが、姿勢が直立に近くなった。『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』では前作で機能に受けた大きな傷が胸に残っている。設定身長100mと再び巨大化した『ゴジラ FINAL WARS』(04)は、アクション重視の細身体形となり、尖った耳が特徴だ。



『ゴジラ 2000 ミレニアム』(1999)



『ゴジラ×メガギラス G消滅作戦』(2000)



『ゴジラ モスラ キングギドラ 大怪獣総攻撃』(2001)



『ゴジラ× メカゴジラ』(2002)



『ゴジラ×モスラ ×メカゴジラ 東京SOS』(2003)



『ゴジラ FINAL WARS』(2004)

『シン・ゴジラ』『ゴジラ−1.0』

新時代のゴジラは第1作をリスペクトしながらも自由で新たな発想のゴジラが登場。『シン・ゴジラ』(16)は初の完全フルCGで、人間の体形や動きを想起させない。未知の完全生物で設定身長は118.5m。体内で自己破壊と再生を繰り返して形態変化しながら進化する。第1形態はオタマジャクシ状とされ、第2形態はサメのラブカ似、第3形態は水棲生物から陸棲生物へ進化、第4形態は感情のない目で、エネルギー(捕食)を必要としないため乱杭歯で舌はない。尾は異様に長く、尾や背びれからも熱線を発射可能。ラストで尾に現れた第5形態は異形な人間のようだった。1945年～1947年というゴジラ映画最古の時代設定に出現(ゴジラザウルスを除く)した『ゴジラ−1.0』(23)もフルCGとなり、設定体高は50.1m。放射熱線も尾から順に背びれが伸びていき、一気に引っ込んで吐くのが特徴。原子爆弾のインプロージョン方式に発想を得た演出になっている。損傷と再生によって顔に傷を負った姿も特徴的だ。

(文：竹之内 円)



『シン・ゴジラ』(2016)



『ゴジラ−1.0』(2023)

ゴジラ襲来ポイント

日本各地に現れているゴジラは、容赦なく全国の史跡や観光名所を破壊してきた。ここではゴジラがこれまでに襲撃、破壊した主なスポットを紹介する。

北海道『ゴジラVSキングギドラ』(91)でゴジラは、さっぽろテレビ塔を倒した後に地下街を踏み抜いて転倒、起き上がると一帯を破壊した。『ゴジラ2000 ミレニアム』(99)では根室に現れ、駅周辺を火の海にした。



『ゴジラVSキングギドラ』© TOHO CO., LTD.

千葉県『ゴジラVSメカゴジラ』(93)での決戦は幕張ベイエリアで、幕張メッセや千葉マリンスタジアム(当時)など一帯が瓦礫の山と化した。

東京都 **●銀座**『ゴジラ』(54)でゴジラは品川沖から銀座へと向かい、松坂屋、銀座・和光(当時)、日劇などの名所を破壊。日本一の繁華街も一夜にして壊滅状態になった。『ゴジラ』(84)でも有楽町マリオンを破壊し、『シン・ゴジラ』(16)でも米軍の攻撃を受けたゴジラが熱線を広範囲に放射し、銀座の街が破壊される場面がある。そして『ゴジラ−1.0』(23)では、戦後復興を遂げた1947年の銀座をゴジラが襲う。晴海通りを歩き、数寄屋橋を踏み抜く。そして日劇と隣接する朝日新聞東京本社を破壊。惨状を伝えるレポーターが立っていたマツダビルも崩壊する。ゴジラの熱線によって、銀座にはキノコ雲が立ち上がり、黒い雨が降った。



『ゴジラ』© TOHO CO., LTD.

●国会議事堂『ゴジラ』(54)で壊された国会議事堂は、『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』(03)でも、ゴジラと再起動した機龍が激突し、組み合った2体が倒れこんで破壊される。『ゴジラ−1.0』(23)では四号戦車がゴジラに向かい砲撃。その後、熱線によって吹き飛ばされている。

●新宿『ゴジラ』(84)では新宿住友ビルやホテルセンチュリーハイアット(当時)など新宿副都心を破壊。『ゴジラVSキングギドラ』(91)では完成したばかりの新都庁を前にゴジラとメカキングギドラが決戦。上空のキングギドラを狙った放射熱線が都庁上部をかすめて破壊した。その後も、キングギドラの引力光線やゴジラが倒れこむなどして徐々に破壊されていった。『ゴジラ2000 ミレニアム』(99)では新宿駅を破壊し、ミレニアンのUFOが着地していた東京オペラシティにも放射熱線を浴びせた。

●台場・臨海副都心『ゴジラVSデストロイア』(95)の最終決戦は臨海副都心が舞台で、2体の激突で東京ビッグサイトが瓦礫の山と化した。『ゴジラ×メガギラス G消滅作戦』(00)では、台場に現れたメガギラスに放射熱線を吐くが避けられ、ホテル・グランパシフィック・メリディアン(当時)が吹き飛ばされる。さらにメガギラスに引きずられたゴジラは、アクアシティお台場に突っ込んでしまう。

●東京タワー ゴジラ作品ではっきりと東京タワーが破壊されたのは『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』(03)のみ。モスラに向けた放射熱線を避けられ、運悪く後ろにあった東京タワーに直撃する。『ゴジラ FINAL WARS』(04)の終盤では、地球に向かってくる隕石にゴジラが放ったハイパースパイラル熱線によって大爆発が起きて東京は焦土と化し、折れ曲がった東京タワーが見える。山崎貴監督作品『ALWAYS 続・三丁目の夕日』(07)の冒頭では茶川竜之介が描く小説の世界にゴジラが登場。熱線によって東京タワーが半分に折れ、ゆっくりと崩落していく。

神奈川県『ゴジラVSモスラ』(92)で横浜みなとみらい21の巨大観覧車とヨコハマ グランド インターコンチネンタル ホテルを放射熱線で破壊。『ゴジラ モスラ キングギドラ 大怪獣総攻撃』(01)で横浜ランドマークタワーを吹き飛ばした。『ゴジラ×メカゴジラ』(02)では機龍のテスト起動中に現れたゴジラは、横浜・八景島シーパラダイスを襲った。『ゴジラ モスラ キングギドラ 大怪獣総攻撃』(01)では箱根ロープウェイ大涌谷駅がゴジラとバラゴンの戦いによって破壊。『シン・ゴジラ』(16)では江の島近辺を通過。『ゴジラ−1.0』(23)での2度目の上陸地点は鎌倉である。

静岡県『キングコング対ゴジラ』(62)の最終決戦の場は富士山麓。ゴジラとキングコングはもみ合いながら斜面を転げ落ちていき、熱海城を巻き込んで破壊、海へと落ちていった。その後も富士周辺は決戦の地として登場している。『ゴジラ モスラ キングギドラ 大怪獣総攻撃』(01)ではエスパルスドリームプラザ近辺を襲撃、富士市を横断していく。

長野県 山崎貴監督の出身地である長野県松本市には『三大怪獣 地球最大の決戦』(64)でキングギドラが襲来。キングギドラが巻き起こした突風で松本城が破壊される。

愛知県『モスラ対ゴジラ』(64)では、尾を名古屋テレビ塔(当時)に巻きつけて倒そうとするも尾が抜けて手前のビルに激突し、倒れてきたテレビ塔がゴジラにのしかかった。名古屋城では堀で足を滑らせて倒れこみ、城を破壊した。



『モスラ対ゴジラ』© TOHO CO., LTD.

三重県『ゴジラVSメカゴジラ』(93)では鈴鹿サーキットに襲来。ゴジラの襲来から多くの来場者が逃げ惑うシーンがある。

福井県『ゴジラVSビオランテ』(89)ではビオランテとの最終決戦地は若狭湾となっている。

京都府『ゴジラVSメカゴジラ』(93)で京都に現れたゴジラは、京都タワーを放射熱線で吹き飛ばし、五重塔や清水寺周辺を破壊しながら進撃した。

大阪府『ゴジラの逆襲』(55)でゴジラはアンギラスと戦いながら心斎橋、淀屋橋へと移動し、大阪城へたどり着く。組み合った2体は倒れこむようにして大阪城を破壊。『ゴジラVSビオランテ』(89)では大阪ビジネスパークから中之島周辺を破壊した。

福岡県『ゴジラVSスペースゴジラ』(94)では、福岡タワーに巣を作ったスペースゴジラを目指す途中、アクロス福岡などを破壊。スペースゴジラと対峙したゴジラは重力波グラビ・トルネードによって持ち上げられ、ヒルトン福岡シーホークに激突。最後はゴジラがM.O.G.E.R.A.の協力を得て、スペースゴジラがエネルギーを蓄えていた福岡タワーを倒壊させた。



『ゴジラVSスペースゴジラ』© TOHO CO., LTD.

大分県『ゴジラVSスペースゴジラ』(94)は九州の多くの県が被害を受けており、大分では城島後楽園ゆうえんち(当時)にゴジラが襲来。別府タワー近辺にもゴジラが現れる。

鹿児島県 同じく『ゴジラVSスペースゴジラ』(94)では、鹿児島湾からゴジラが上陸。鹿児島市で天文館通りや鹿児島城が破壊される。

(文:竹之内 円)



監督・脚本・VFX

山崎 貴

INTERVIEW 2

ハリウッドのゴジラのように野獣的に戦うのではなく、獣と神様の両方を兼ね備えた存在という意識ですべて考えていきましたね。

――以前に二度、ゴジラを映像化していますね。その時のデザインのコンセプトは？

『ALWAYS　続・三丁目の夕日』の時は、『ゴジラ・モスラ・キングギドラ　大怪獣総攻撃』のゴジラが、少しイメージにありました。次の「ゴジラ・ザ・ライド　大怪獣頂上決戦」ではかなりゴジラを研究して、かっこいいゴジラを目指したんです。その時は僕が出したラフなデザインを、ZBrushという3Dで彫刻できるソフトの凄腕モデリングアーティスト・田口工亮君が、さらにいいものに仕上げてくれました。

――今回のゴジラのデザインは、どのようなプロセスを経て決まっていったのですか？

最初はいろいろ考えたんです。獣感を強めた細身の体形のものや今よりも背びれが目立つもの、ビキニ環礁で体の半身を被爆して、半分はケロイド状で半分がゴジラっぽいものなど、かなり試行錯誤を重ねました。「新生丸」の機雷で顔の肉が取れてからは、そこの細胞再生にエラーが出て、牙や骨が見えた"スカーフェイス"状態になってしまうものも考えましたが、後半ずっとその顔で出てくるのはどうかと思ってやめました。今回のゴジラは細胞が再生するけれども、あまりひどいダメージを受けると完全再生できずにエラーが出る。元々大戸島にいた呉爾羅が、ビキニ環礁の原爆実験で一度強烈なダメージを受けたのに、再生しようと頑張ってこの姿になったという設定ですから、完成した映画でも「新生丸」の機雷にやられたり「高雄」に砲撃されて再生した部分は他と顔の色が違っているんです。そんな試行錯誤の末に、やはりディス・イズ・ゴジラという部分はある程度大事にしなきゃいけないと思って、最終的には「ゴジラ・ザ・ライド」のゴジラが一番いいなということになったんです。

――「ゴジラ・ザ・ライド」のデザインに戻っていったわけですね。

理想的なゴジラをあの時作っていたので、そこに戻ってブラッシュアップしていこうと。あのゴジラはゴジラファンの間でも評判が良かったですから、それを踏襲するのが一番いいと考えたんです。

――基本のデザインは決まったとして、今回のゴジラで特徴的な部分は？

頭が小さくて足が太く、全体のフォルムとして三角形に見える。僕は首が立っていないと日本のゴジラにならないと思うんです。ハリウッドのゴジラは前傾姿勢で戦う気満々だけれど、日本のゴジラは半分神様だから、基本的には直立している。それでいて人間のようには見えないように、足は獣脚にしました。最初から獣脚にはこだわりました。着ぐるみのゴジラにはできないデザインにしようと思ったんです。また、恐竜のような動きをある程度はできるようにして、感情的になった時には体を激しく動かす。でもハリウッドのゴジラのように野獣的に戦うのではなく、獣と神様の両方を兼ね備えた存在という意識ですべて考えていきましたね。

――今回のゴジラで印象的なのは、熱線を吐く時の背びれの動きですね。

背びれが徐々に伸びていって、それが一気に引っ込んでから熱線を吐くんです。原子爆弾の構造は要するに、核物質が臨界を超えるように爆薬の力でひとまとめにすると、大爆発が起こる。ゴジラは核の申し子だと思っているので、そのイメージを投影した感じですね。またこのゴジラは熱線を一度吐いたら、続けては吐けない。一発必中の攻撃なので、吐くまでの儀式をしっかり見せて、大変なことが起こっている感を出したかったんです。

――他にも部分的なこだわりはありますか？

『シン・ゴジラ』と同じ方向へ行かないようにしようと思いました。すごく好きな作品なので、あの映画を追いかけて同じ方へ行くと逆にまずいなと。だから『シン・ゴジラ』では長いしっぽが特徴的でしたが、今回はしっぽの長さはそうでもない。ただしっぽが素早く振り回されると、街が大変な被害を受けると。また目の形は最初、半月形の"ゴジラ目"にしたかったんです。『シン・ゴジラ』は人間の目にしてデザインしたと文献で読んだので、こっちは"ゴジラ目"にしようと。ところが田口君は、僕が何回オーダーしても人間みたいな目にしてきて。でも段々これはこれで怖い目だなと思えてきて、田口君のこだわりを活かしました。

――今回の映画は、自分が今までやってきたことのすべてを使った集大成感があると、完成報告会見でおっしゃっていましたね。

自分の土俵に連れてこないと、この映画に勝ち目はないと思っていたので、かなり得意ジャンルを取り込みました。これまで手掛けた『ALWAYS　三丁目の夕日』シリーズや『永遠の0』、『アルキメデスの大戦』、『海賊とよばれた男』といった"昭和史"シリーズの要素を入れないと、勝負できないと思ったんです。そうしたら今まで培ってきたものをいろいろ投入することになったので、集大成感が出た作品になりました。あとはソフトの進化も大きかった。実は『ALWAYS　続・三丁目の夕日』で冒頭のゴジラによる鈴木オート破壊シーンを作った時、一人の技術者がワンカット仕上げるのに6カ月間かかりきりになったんです。それだと自分が思っているものを作ろうとしたら、今の技術とマシンのスピードでは無理だと思って、いつかゴジラ映画を作るという希望は一度封印したんですよ。でも『シン・ゴジラ』を観て、ここまでやれるようになったのかと思って、自分もゴジラ映画を作ろうという気持ちになりましたね。

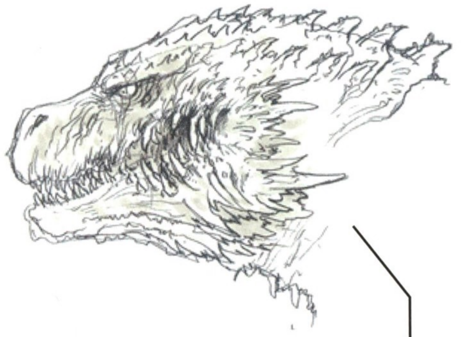
――今回のゴジラにはどんなイメージを持たせようとしましたか？

とても怖くおぞましい存在だけれど、どこか惹かれてしまう。そんな魅力が出せないかなと思いました。それと、神様に会った時のような感覚がほしかった。いざゴジラを倒したら、「大変なことをやっちゃったかもしれない」と畏怖の念が沸き上がってくる、そんな生物を超えた雰囲気を持たせたいと思いましたね。

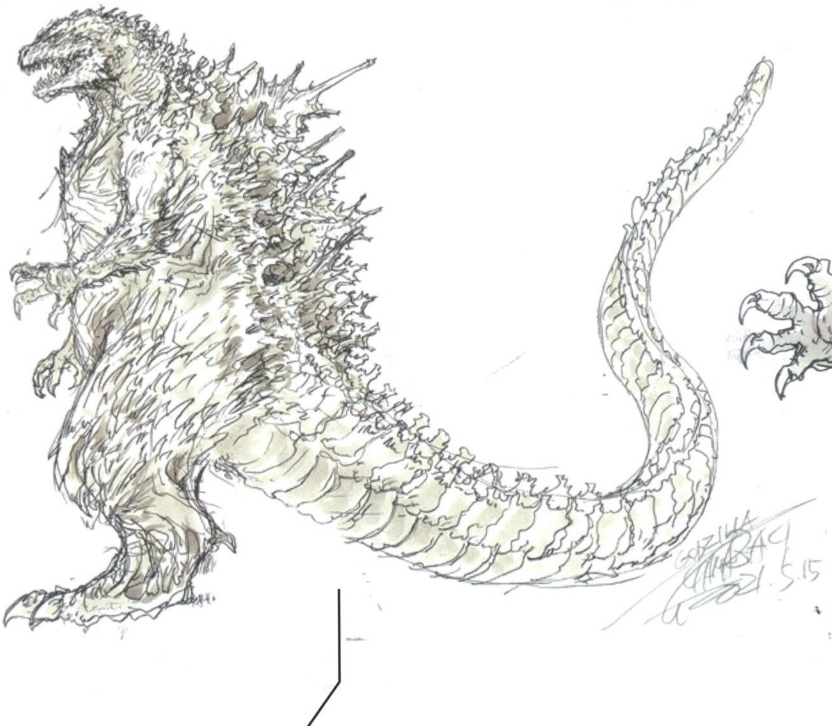
山崎監督によるゴジラデザイン画



最初は、「ゴジラ・ザ・ライド」とは別の方向性のデザインも検討されていた。その内の一つが前傾姿勢で獣感の強いもの。かかとを浮かせた足の形は最後まで引き継がれた。



顔面に受けた機雷による傷を再生しようとするも、損壊がひどいため再生機能にエラーが生じ、頬にまで牙が生えてきてしまったという設定。CGならではの表現として検討されていた。



ビキニ環礁で原子爆弾によって右半身が被曝し、傷が完全に再生せずケロイド状に残っている、という設定も考えられていた。



最終形に最も近いデザイン。直立し、胸を張った姿勢が神々しさを感じさせる。大きな脚と小さな頭で、三角形のフォルムになっている。







『シン・ゴジラ』が残した宿題

本作『ゴジラ-1.0』は、1954年公開のシリーズ第１作目となる『ゴジラ』から数えて通算30作目の国産実写ゴジラ映画となる。2024年はゴジラ誕生70周年にあたり、さまざまな意味で大きな節目となる作品なだけに、その生みの過程においては大きな苦しみがあったという。

前作『シン・ゴジラ』もまた、『ゴジラ FINAL WARS』以来約12年ぶりとなる国産実写ゴジラ映画という巨大な重圧のもとで公開された作品だった。2014年に公開されたレジェンダリー・ピクチャーズ製作の『GODZILLA ゴジラ』がヒットを記録していたとはいえ、その時点で国産実写ゴジラ映画がどれだけの観客を呼び込めるかは未知数。しかし蓋を開けてみれば『シン・ゴジラ』は興行収入82.5億円というゴジラシリーズ史上最大のヒットを記録。“ゴジラ”というキャラクターが持つポテンシャルの高さを世に見せつけた。

だがその大きな成功ゆえに『シン・ゴジラ』という作品はシリーズの製作を手掛ける東宝にとって、大きな重石にもなっていたという。本作の企画・プロデュースを務めた岸田一晃は言う。

「『シン・ゴジラ』の後、東宝社内では新たな実写ゴジラ映画の企画がいくつも検討されました。しかし『シン・ゴジラ』に続くに相応しいと思える企画をなかなか生み出すことができませんでした」

同じく企画・プロデュースを手掛けた山田兼司もこのように語る。

「『シン・ゴジラ』は、現代を舞台にしたゴジラ映画がやるべきことをもれなくやり尽くした、まさにエポックメイキングと言える作品です。それを観たファンの期待に応えられる新たな実写ゴジラ映画を生み出すためには、まったく新しい未知のコンセプトが必要でした」

数々の企画が発案、検討され、そして消えていく中で、やがて『ALWAYS　三丁目の夕日』シリーズや『永遠の０』、『アルキメデスの大戦』などのヒット作品を手掛けてきた映画監督・山崎貴に白羽の矢が立つ。

「山崎監督は、日本でも有数のVFX技術に長けた監督であると同時に多くのヒット作を生み出してきた実績もあります。さらに『ALWAYS　続・三丁目の夕日』の冒頭でゴジラを登場させたように、その深いゴジラ愛についても東宝社内では広く知られていました。“山崎監督による実写ゴジラ映画”という企画は、東宝社内で“やるかやらないか”ではなく“いつやるのか”というものとして、ずっと温存されていました。『シン・ゴジラ』に続く――そして通算30本目となる国産実写ゴジラ映画として、満を持してその企画が本格始動したんです」と山田は言う。

監督・山崎貴

「ゴジラ映画の監督をしないかというオファーは、実は以前にも頂いていたことがあるんです。『ALWAYS　続・三丁目の夕日』の後くらいですね。この作品でゴジラを登場させたところ、大きな反響を得られ、その流れで一度オファーがありました。ただ『ALWAYS　続・三丁目の夕日』ではわずか２分のゴジラの登場シーンのために、かなりの数の人員と時間を投入する必要がありました。当時の技術や環境では１本のゴジラ映画を作れるだけのリソースはまだないと判断し、辞退したんです」

『ALWAYS　続・三丁目の夕日』でのゴジラ登場は山崎貴監督を見出し、彼の作品を漏れなくプロデュースし続けてきた阿部秀司が粘り強く東宝に交渉をして許諾を得たシーンだった（本作ではエグゼクティブ・プロデューサーを担当）。本作の監督・脚本・ＶＦＸを務めた山崎貴は振り返る。

「『ALWAYS　続・三丁目の夕日』でゴジラを登場させることができたことで、自分の中で一旦“ゴジラ映画を撮りたい”という欲望が落ち着いてしまったんです。そのため、ゴジラ映画を撮る機会がまたやってくるとは想像もしていませんでした。だから『シン・ゴジラ』公開時には“次をやる人のハードルはとんでもなく上がってしまいましたね”なんて他人事のような推薦コメントを寄せているんです（笑）*1」

自分自身がまさに“次をやる人”になってしまうことに逡巡はなかったのだろうか？　山崎はその疑問に対してこう答える。

「あれから技術もマシンも格段に進歩しましたし、僕自身も映画監督として多くの経験を積んできました。また、幸いにも『ゴジラ-1.0』のオファーを受けた後に「ゴジラ・ザ・ライド 大怪獣頂上決戦」*2というアトラクションの映像を制作する機会もあり、今の技術と環境であれば自分が理想とするゴジラ映画を作れるという確信を得ました」

1945年〜1947年という時代設定

こうして記念すべき30作目となる国産実写ゴジラ映画の監督を引き受けることになった山崎が提案したアイデアが、“終戦後すぐの日本を舞台にしたゴジラ”だった。

「やはり僕にとっては1954年の『ゴジラ』がとても大きな存在で、そのためゴジラに対して“戦







争の化身”というイメージがあるんです。だからもし自分がゴジラ映画を撮るのならば、戦争の匂いの残る時代——終戦直後の日本を舞台にしたい、という気持ちはずっと昔からありました。ちょうど『シン・ゴジラ』が現代日本を舞台にしたゴジラ映画としてとてつもなく完成度の高い作品だったこともあり、あまり悩むことなくそのアイデアを提案することができました」と山崎は言う。

2019年3月頃、山崎から東宝にメールで新作ゴジラの自身のプロットアイデアが提出される。当時『アルキメデスの大戦』のプロデューサー補を務めていた岸田は言う。

「ちょうど『アルキメデスの大戦』の制作が終盤に差し掛かった頃でした。メールでファーストプロットを頂いたんですが、その時点で、すでに“終戦直後の日本が舞台で、元特攻兵の主人公を中心とした民間の人々が、ゴジラという巨大な災厄に立ち向かう”という物語のコアが組み込まれていました。その後、何度か打ち合わせを続け『アルキメデスの大戦』公開直後の7月に社内で改めて検討会が開かれることになりました」

その検討会には、山田も参加していた。

「僕や岸田も含めて東宝社内に主だったプロデューサーが勢ぞろいして、ディスカッションを交わしたんです。普通の映画で、これだけのプロデューサーが集まることはそうそうありません。ゴジラ映画だからこそ、ですね。それまで無数の企画が検討されては没になっていきましたが、1作目の『ゴジラ』より前の時代——1945年～1947年を舞台にするという山崎監督のアイデアは絶賛でした」

命を賭して戦うのではなく、生を追求するために戦う物語

戦後の日本を舞台にするという、山崎のアイデアのいったいどこが革新的だったのか。山田は言う。

「山崎監督のアイデアでもっとも惹かれた点は、終戦直後という日本が国家としてもっとも脆弱だった時代を舞台にしていることです。旧軍は解体され、自衛隊も創設されていません。政府の機能も限りなく縮小されています。そのためゴジラという巨大な災厄に、市民は自らの力で立ち向かっていくしかない……そのテーマが見えた時に、大きな手応えを感じました。人知を超えた巨大な存在と相対する人間というのは、世界各地の神話にも見られる、時代を超えた普遍的なテーマです。それゆえに1947年という時代を舞台にしつつも、現代の我々の心に響く作品になると確信したんです」

岸田も「山崎監督が描きたい物語は“ゴジラ対日本”ではなく、“ゴジラ対人間”であり、その人々にとってゴジラとはどういった存在なのか？というディスカッションを重ねていきました。政府や官僚、軍隊ではなく“私たち”がゴジラに立ち向かう。その芯が見えてきたことで、“命を賭して戦うことを求められてしまった時代”から“市民が主体的になって生を追求する時代”の変化を、ゴジラと遭遇してしまった敷島という青年を通じて描くというコンセプトにたどり着きました」と語る。

本作の宣伝キャッチコピー“生きて、抗え。”というフレーズにも繋がるこの主題は、山崎監督がこれまでの作品を手掛ける中で、徐々に醸成されてきたものだという。

「『永遠の0』や『アルキメデスの大戦』など、これまで第二次大戦を題材にした映画を監督するにあたって、さまざまなリサーチを行ってきました。それによって大戦中の日本がいかに人命を軽視してきたかについて、知り過ぎるほど知らされました。1作目の『ゴジラ』にも、作品の中心には反戦・反核というテーマが大きく存在します。本作もその意志を受け継ぐために、人命を軽視した戦中日本のアンチテーゼとして“生”に執着する物語にしよう、ということは強く意識していました」

こうして山崎監督と山田、岸田を中心とする東宝のプロデューサー陣とのディスカッションは幾度も重ねられていった。忌憚のない意見が交わされ、作品の輪郭が次第に見え始める中で、ついに山崎は脚本の執筆に取りかかる。だがそのタイミングで、本作の制作の前に巨大な暗雲が垂れ込める。

新型コロナウイルス感染症が残した影響

2019年末、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)と呼ばれる新たな感染症が世界を襲った。爆発的な感染力と高い危険度を持つこの感染症の蔓延によって、世界も社会も大きな変化を余儀なくされた。その影響は本作にも及び、制作は一時中断となってしまう。

岸田は新型コロナの到来した当時を振り返る。

「コロナ禍は我々映画制作を行う人間にとってもまた、大きなインパクトのある出来事でした。映画は集団で制作するものです。人を集めなければ映画は作れません。しかし当時新型コロナについて感染の経路も判明しておらず、どのような対策をすればいいのかも皆目見当がつきませんでした。数百人以上が関わる“ゴジラ”というビッグプロジェクトだからこそ、制作を一時中断せざるをえませんでした。撮影の目途がまったく見えなくなったということです」

制作が中断されても、阿部、山田、岸田、ROBOTのプロデューサー・守屋圭一郎と山崎は脚本の打ち合わせと執筆を続け改稿を重ねていく。そして新型コロナは本作の制作だけでなく、物語にも影響を与えていくことになる。岸田は述懐する。

「ちょうどその頃に書かれた脚本から、“民間”













や“無政府”、“現場”といった言葉が強調され始めるんです。議事録にもこういった言葉が無数に残っています。まったく未知の感染症であるが故に、国や政府がすぐに適切な対応を取れず、後手に回り、人々が自分自身の力で考えて選択しなければならない、未来への不安を誰も拭ってくれない環境……政府が機能せず、人々が自らの力でゴジラに立ち向かわなければならない本作の物語と現実がリンクし始めました」

山崎もまた、当時脚本を執筆する中で新型コロナが大きな影響を与えたことを否定しない。

「1作目の『ゴジラ』ではヒロシマ・ナガサキや第五福竜丸事件、1984年の『ゴジラ』では米ソ冷戦、『シン・ゴジラ』では3.11……ゴジラ映画は常にその時代の写し鏡となってきました。『ゴジラ-1.0』も企画当初こそ特定の事件や事故に依存しない、普遍的な物語を追求するつもりでしたが、結果として新型コロナという世界規模の大災害を濃厚に映し取り、現実世界では新たな戦争が勃発している時代にもなりました。やはりゴジラ映画は、否応なく時代的な要素をはらんでしまう……そんな宿命にあると感じました」

見るものに恐怖を抱かせる新たなゴジラ

ゴジラ映画においてコンセプトやストーリーに並んで重要となるものがある。映画の主役たるゴジラの造形だ。岸田は本作のゴジラデザインについてこう語る。

「前作『シン・ゴジラ』に登場するゴジラは、これまで培われたゴジラ像から離れた、まさに異端とも言うべきゴジラでした。それに対して本作のゴジラは、これまでの約70年の歴史の中で描かれたゴジラへのリスペクトを持ち合わせつつ、より強く、より怖い正統派ゴジラを目指しました」

岸田が指摘するように本作のゴジラは、獣のような鋭い顔つき、岩肌を彷彿とさせるゴツゴツした黒い肌、筋骨隆々のプロポーションなど、これまで我々が慣れ親しんできたゴジラのイメージがコアにあるような王道の追求だ。

本作のゴジラのデザインについては、山田もまた激賞する。「ゴジラには、神話的な存在という一面もあります。かっこよさと怖さが同居する、唯一無二の存在感が必要だと思うんです。まさにその重要なデザイン上のポイントを、山崎監督は見事に表現してくれました」

約70年の歴史を総決算し、その本質を見事に体現した本作のゴジラのデザインのコンセプトについて、山崎はこう語る。

「1作目の『ゴジラ』の初代ゴジラと同じくらい、金子修介さんが監督した『ゴジラ・モスラ・キングギドラ 大怪獣総攻撃』の白目を剥いたゴジラも好きなんです。自分の中でゴジラは怖い存在であってほしい、という思いがあり、いかにして恐ろしいゴジラにするかということを意識しました」

本作のゴジラのデザインスケッチは山崎自身の手によって描かれている。デザインスケッチを見ると、かなり早い段階で完成デザインに近いイメージが決定していたことがわかる。

「デザインスケッチの段階では、核実験の後遺症でより肌に生々しい傷を負わせたデザインや鳥足のような脚をした俊敏そうなデザインも描いてみました。ただ1作目の『ゴジラ』と近い時代設定にしたということもあり、かなり早い段階でそうした変化球なデザインではない、王道的なゴジラにしようとは決めていました。直前に監督した『ゴジラ・ザ・ライド』で自分としてはかなり理想的なゴジラをデザインできたのもあって、本作のゴジラのデザインもその影響をかなり受けています」

また本作のゴジラの特徴として、人間に対して危害を加える描写がより具体的に表現されていることが挙げられる。岸田は語る。

「これまでのゴジラ作品で人間の死というもの表現してこなかったわけではありません。例えば1作目でも、ゴジラが東京を襲撃する際に、逃げ遅れた母親が子どもに向かって『お父ちゃまのところに行くのよ』と語りかける痛烈な場面があります。1954年が舞台であることを考えれば、その父親が戦争で亡くなっているのではないか？というイメージが込められたような演出がなされています。このようにゴジラ映画はこれまでにも人間の死というものをしっかり描いてきました。しかし、そうした作品でも建物ごと破壊したり、画面外でそれを匂わせたり、ゴジラが人間に危害を加える様子を間接的に描写する場合がほとんどでした。本作においては、人々が生を追求する物語である以上、人間の死

の描写を直接的に表現することでゴジラという存在の恐ろしさを描くことは必要不可欠でした。さらに今回は昭和の街並みに登場する50m級のゴジラです。『簡単に命を奪われるかもしれない恐怖』を体感させるサイズ設定でした」

より恐怖感を煽る本作のゴジラの表現に対して、意外なことに東宝から制約や細かな注文は特になかったという。

「もちろんゴジラは東宝に所属するスターなので、その表現においてある程度の“こうしてほしい”というレギュレーションは存在します。しかし同時に約70年という長い歴史の中で、ゴジラもさまざまな表現が試みられてきました。ゴジラにはさまざまな表現を許容する器があります。ですから新しい表現を追求するにあたって、予め細かな制約を求めることはしません。ましてや山崎監督の場合、絶大なゴジラ愛を持っていることもあり、監督が目指す表現に対してＮＧを出すことはなく、ブラッシュアップを目指すのみでした」と岸田は言う。

山崎監督作品常連の精鋭スタッフと、ゴジラに立ち向かう市井の人々を演じるキャスト

新型コロナという未曾有の危機への対処法を日本社会が少し学びつつある中、本作の制作もまた再開される。

本作のメインスタッフとして集結したのは撮影・柴崎幸三、照明・上田なりゆき、美術・上條安里、VFXディレクター・渋谷紀世子、音楽・佐藤直紀など、山崎監督作品を支えてきた精鋭たち。

ゴジラという架空の存在を描き出し、戦後の日本を画面上で再現してみせるのは、山崎監督自身も所属するＶＦＸスタジオ白組。日本最高峰のＶＦＸスタジオの最新かつ最大規模のＶＦＸ映像が実現した。

山田と岸田はスタッフだけでなく、キャスティングにも自信を覗かせる。

主人公である元特攻兵の青年・敷島浩一役に神木隆之介、敷島とともに終戦後の日本を生きる女性・大石典子役には浜辺美波がキャスティングされた。ほかにも山田裕貴、青木崇高、安藤サクラ、吉岡秀隆、そして佐々木蔵之介といった実力派俳優陣が脇を固める（吉岡は『ALWAYS 三丁目の夕日』シリーズや『海賊とよばれた男』以来５度目の山崎監督とのタッグとなる）。

本作のキャスティングについて岸田はこう語る。

「これまでのゴジラ映画で、ゴジラという災害に立ち向かったのは自衛隊や科学者、政治家や官僚といった人たちでした。本作では市井の人々が中心となってゴジラに立ち向かいます。キャスティングにおいて重要視したのは、戦後を生きる一般人であること。戦後という舞台でありながら現代の一般市民（観客）が身近に思えて感情移入できる存在であるかどうかでした。そう考えた時に、メインの神木隆之介さんや、浜辺美波さんについてはほとんど迷わずオファーすることができました」

山田もまた主演二人の存在の重要性について語る。「神木隆之介さんと浜辺美波さんという若く頼もしいキャストが参加してくれたことは、本作にとってとても重要なことでした。お二人の演技のおかげで終戦直後の日本でゴジラに立ち向かい生を追求する人々の物語に血を通わせることができました。このメインキャストを中心にまさにベストキャストを揃えることができたと思います」

新型コロナという大難に見舞われながらも、まさに国産実写ゴジラ映画30作目に相応しい、現代日本映画の総力ともいえる製作体制が整えられた『ゴジラ-1.0』。その成果をぜひ大スクリーンで目撃してほしい。

（取材・文：坂下大樹〔株式会社ジェネット〕）

※１　推薦コメント：山崎貴監督が当時『シン・ゴジラ』の広告に寄せた推薦コメント。全文は以下の通り。「ゴジラというコンテンツを、あれだけ好きな物を詰め込みながら上昇気流に再び乗せてしまったその手腕に脱帽です。次をやる人のハードルはとんでもなく上がってしまいましたね」

※２　「ゴジラ・ザ・ライド　大怪獣頂上決戦」：西武園ゆうえんちで2021年５月より稼働中の映像アトラクション。山崎貴監督とマルチクリエイターとして活躍する株式会社刀のシニア・クリエイティブ・ディレクター津野庄一郎氏がタッグを組んで制作された。








渋谷紀世子

VFXディレクター

PROFILE｜1970年生まれ、東京都出身。89年、ミニチュアメーカーとして白組に入社後、伊丹十三監督の『大病人』(93)にデジタル合成として参加。以後多数のCM、映画等のVFXに従事。山崎貴監督のデビュー作『ジュブナイル』(00)から、白組が制作したすべての山崎監督作品でVFXディレクターを担当。『STAND BY MEドラえもん』シリーズ(14・20)ほか3DCG作品では企画プロデューサーも務めている。

INTERVIEW

ゴジラが間近に迫ってくる恐怖や絶望感を経験してもらいたいと思っていました。

――この企画には、どのような流れで関わっていったのでしょうか？

早い段階から次回作がゴジラ映画になるかもしれないと山崎監督から聞いていました。『ALWAYS　続・三丁目の夕日』の冒頭シーンのゴジラの演出を手掛けており、ゴジラに対する強い想いが監督にあるのを知っていたので、いよいよ来たなと思いましたね。最初にプロットを読んで、市街戦は避けられないと想定していたんですが、クライマックスで海洋での戦いをぜひやりたい！と監督に熱望されたので、これはエフェクトなどの部分でかなりの準備と覚悟をしなくてはならないと思いました。

――それは水の表現が難しいということでしょうか？

水をCGで表現するのはとても大変です。ゴジラが起こす独自の水の動きや重力表現を、コンピュータ上で何度もシミュレーションさせる必要があるんです。10年前に制作した『永遠の０』では、空母が航行している時の波しぶきや海面や波のうねりを、実際に航行している船を空撮し、水の部分は実写をそのまま使用、CGの空母だけ合成していたんです。2019年の『アルキメデスの大戦』では、冒頭５分半の戦艦大和の沈没シーンで、初めて水の表現をすべてCGで作成することができました。今回は、その時に担当してもらったエフェクトスタッフに早くから声をかけ、またマシンのスペックも年々向上して、扱いやすいソフトも揃い、今ならやれると。シミュレーションマシンもかなり増強して挑みました

――プロットを検討して、次の段階は？

プロットが脚本化され、監督が絵コンテを描いていきますが、描かれたコンテはカットごと、またはカットの部分ごとに分解され、撮影に関わるすべてのスタッフで打ち合わせしていきます。実写で撮影できるものとできないものに分け、どの部分を美術で、あるいはVFXで受け持つか、撮影できる部分でも、ロケーションなのかスタジオ撮影なのか、セットを建てるのかグリーンバックが必要なのか、エキストラはどの程度必要か、アクションや操演も関わるならばどうすると、細かい打ち合わせを何度も繰り返し行われていくんです。

――絵コンテの後には、プリビズの制作に入るわけですね。

事前にスタッフ全体でシーンやカットのイメージを共有するためにプリビズは制作されます。実際の撮影状況を想定し、使用するカメラとレンズを用いて、コンテを基にシーンを検討することで、アングルやシーンの構成、表現方法の変更などが判明し、そうなるとコンテまで戻り描き直し、さらに打ち合わせ重ね、新たにプリビズを作成……ということが続いていきます。

――このプリ・プロダクションの段階で緻密な打ち合わせをしておくことで、撮影スケジュールが確かなものになっていくんですね。

VFXディレクターとは？と聞かれたら「監督と一緒にVFXの設計をしていく仕事」と答えることが多いです。なかなか決まらないことも多いんですが、コンテ、プリビズ、打ち合わせを経て、スタッフ全員が共通の認識を持って前に進んでいくというのが、山崎組のやり方なんです。

――具体的な撮影とVFXの組み合わせ方を伺いますが、「新生丸」が航行しているところは、実際に外洋に出て撮っていますよね。

これが『海賊とよばれた男』に出てくる日承丸のような大型船であれば、経験を活かして船の揺れなどもクレーンの動きで再現できるんですが、「新生丸」のような漁船サイズの小型船だと、船の挙動が複雑で再現しづらい。そこで外洋へ船を出して撮影したんですが、ものすごく船が揺れて、キャストの皆さんは本当に大変だったと思います。「新生丸」がゴジラに追いかけられる場面では、後方にもう1隻船(ターゲット船)がいて、後に完成画面ではその船がCGのゴジラになるんですよ。

――「高雄」にゴジラが身を乗り上げて、船が斜めになっていくシーンについては？

甲板が斜めになって人物が落下していくカットは、『アルキメデスの大戦』で戦艦大和が沈没する時と同じ手法を用いました。斜めになった反動で乗組員たちは海水をかぶるはずなので、現場ではクレーンで甲板を持ち上げて斜めにし、周りからスタッフがバケツで水をかけています。銀座4丁目交差点のマツダビル屋上で、報道陣がビルから落ちていくところも、同様の手法を用いています。この時はいろんな雑物を屋上に配置、斜めにした時それらが実際に落下していくようにしました。こういうやり方はローテクかもしれないけれど、きちんとカットの設計がされているので、効果的な映像に仕上がるんです。

――銀座の場面では、都市の破壊シーンが印象的ですね。

これまでの時代物の作品では、その時代に建っていた建物が画として成立していれば、どんな方法で作ってもよかったんですが、今回はCGで作った建物を破壊する。そうなるとそれぞれの建物が、例えばレンガを積み上げた建物なのか、コンクリートなのか木造かによって違う。しかも表面だけでなく、材質を考慮した厚みや内部構造物まで作り込んだCGモデル(ブレイカブル)でないといけない。なので破壊に関わったCGのスタッフは、撮影が始まった頃からコツコツと作り始めていました。また、建物を壊すためには、ゴジラがどんな動きをするのかも決まっている必要があるので、ゴジラのアニメーション作業も早い時期から始まり、それらが出来上がってからようやくシミュレーションが開始と、かなりの時間を必要としました。

――ゴジラ自体の表現で気を付けたことは？

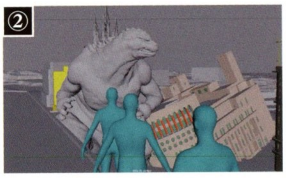
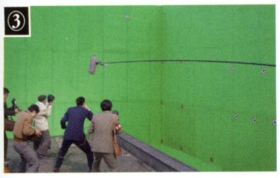
西武園ゆうえんちの「ゴジラ・ザ・ライド　大怪獣頂上決戦」の映像を制作した経験が、すごく大きかったと思います。あのアトラクションによって、ゴジラが間近に迫ってくる恐怖や絶望感を私たち自身が体感していますからね。なんとかあの恐怖を、映画を観に来たお客さんにも経験してもらいたいと思っていました。恐怖が迫ってくる感じを出すために、ゴジラの重量感は意識しました。ゴジラの動きやゴジラによってぐずぐずと壊れていく建物など効果が出ていたと思います。それとゴジラと人間との同一フレーム内での共存ですね。背景に見えるゴジラの足と、その足元を逃げ惑う人々を一緒に捕らえた恐怖感。それはプリビズの段階で何度もシミュレーションして決めていった構図や撮り方でした。

――会見で山崎監督は、これまでやってきたことの集大成という言葉を使っていました。

私もそうだなと思います。『ALWAYS　三丁目の夕日』シリーズ以降、『永遠の０』や、『海賊とよばれた男』、『アルキメデスの大戦』など“ある時代”を表現する作品と、『DESTINY 鎌倉ものがたり』や『ゴーストブック　おばけずかん』のように存在しないものを存在するかの様に表現する作品。その両方の要素が、今回の映画には入っていると思います。今まで制作した作品にとても幅があるので、さまざまなノウハウをスタッフみんなが持っている。それによって、失敗や経験値から学んできたことの積み重ねが、今回の作品には活かされていると思います。最初に企画を聞いた時に“昭和のゴジラ”というワードが出てきて、これは山崎監督に向いているなと思いました。山崎監督だからこそやれるゴジラ映画になったと思います。

VFX MAKING

1.東京に上陸し、銀座4丁目の交差点付近で暴れるゴジラ





①山崎監督が描いた絵コンテ。シーンのおおまかなイメージで絵が描かれている。②コンテを基に作られたプリビズ。この段階に入るとカメラレンズや構図、ゴジラと手前の人々との距離感まで、実写の撮影班、CGスタッフの間で細かい撮り方が決め込まれていく。③マツダビルの屋上で、ゴジラ襲来をレポートする報道陣の芝居をグリーンバックの前で撮影。俳優たちがゴジラを見つめる目線の高さなどが重要になる。④CGで作ったゴジラと破壊された建物のグレーモデル。画面に描かれるものの形が、ここで決定する。⑤破壊によって周囲に充満する煙のエフェクトを付ける。煙をゴジラのどこを隠すほど濃くするかなど、その加減によってリアリティが生まれる。⑥CG調整用に色分けされたマスク。これを指標に細かい部分を調整していく。⑦カラーグレーディングを施し、ゴジラと報道陣が馴染んで見えるように色合いを整えた完成画面。

2.銀座の大通りを歩くゴジラと、恐怖で逃げ惑う群衆

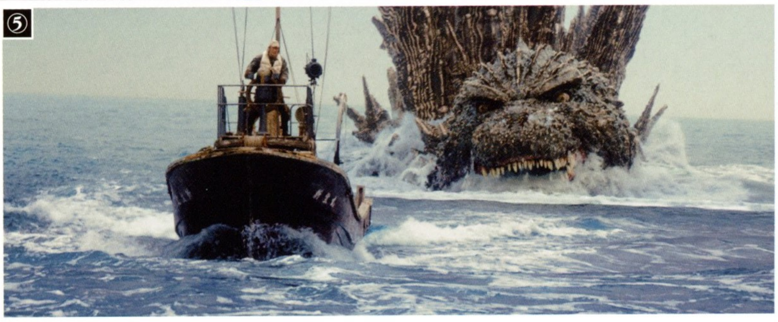




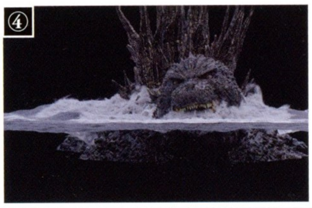


①山崎監督による絵コンテ。②プリビズ。周りの建物などは、まだ仮の物をはめ込んである。③ゴジラに追われる群衆を実写で撮影。群衆の右側にグリーンバックが張られているのは、完成画面の撮影イメージだと、最初は群衆にカメラが寄って、彼らが逃げる様を横位置の移動撮影で撮り、その背景に銀座の街並みを後でCG合成するためである。④完成イメージのグレーモデル。広範囲にわたって建物が作り込まれていることがわかる。⑤カラーグレーディングを施した完成画面。劇中では逃げる群衆に寄った移動撮影から始まり、そのまま引いてゴジラも含めた俯瞰映像へとたどり着く1カットで表現されている。

3.「新生丸」に迫るゴジラ







①山崎監督による絵コンテ。②プリビズ。この段階で「新生丸」と、追うゴジラがどのくらい距離が離れているかを決める。ゴジラが手を伸ばして届かないくらいの距離感にしておかないと、「新生丸」が逃げ切れないからだ。またゴジラと「新生丸」が画面のどこに位置するかの構図も決定する。③実際に外洋に出て、追われる「新生丸」を撮影。後ろに見えるのがターゲット船で、そのポジション、「新生丸」との距離はプリビズ時に決めたことに準じて撮影する。④水面から顔を出したゴジラの水しぶき。このホワイトウォーターの表現が繊細で、このエフェクトに手間がかかった。⑤ターゲット船をゴジラと入れ替えた完成画面。

音楽

佐藤直紀

PROFILE

1970年生まれ、千葉県出身。93年、東京音楽大学作曲科を卒業後、映画、TVドラマ、CMなど、様々な音楽分野で幅広く活躍。山崎貴監督とのコンビでは『ALWAYS　三丁目の夕日』(05)で第29回日本アカデミー賞最優秀音楽賞を受賞したのを始め、『ALWAYS　続・三丁目の夕日』(07)、『永遠の０』(13)、『海賊とよばれた男』(16)でも優秀音楽賞に輝き、山崎作品の音楽を担当するのは今回で16本目になる。他に『海猿』シリーズ(04・06・10・12)、『るろうに剣心』シリーズ(12・14・21)、『劇場版 コード・ブルー　－ドクターヘリ緊急救命－』(18)、『マスカレード・ホテル』(19)、『罪の声』(20)、『マスカレード・ナイト』(21)、『レジェンド＆バタフライ』(23)など、多数の映画音楽を担当。

INTERVIEW 本当にこんなことが起こったのではないか、という恐怖心が観客の方々の感情に出てくる音楽演出にしたいと思いました。

――音楽リストを拝見しますと、「Fear 恐れ」「Pain 痛み」「Confusion 混乱」「Despair 絶望」「Hope 希望」「Resolution 決意」等々のカテゴリーがあります。

今回は画を見ない段階、撮影に入る前の段階で、台本を読んで湧いたイメージに基づいた曲を8曲か9曲くらい、こういう曲が必要だろうな、ということで書いたんです。映画に関して言えば画を見ずに音楽を書いたのは初めてです。台本を読んだ時のインスピレーションを大事にしたいという想いがありました。それで監督に、こんな方向の音楽はどうですか？と提案させていただきました。もちろんそれだけでは足りないので、映像が完成してから新たに作った曲もありますが、7割、8割はその時に書いた曲ですね。1曲1曲はもっと長いんですが、当然、画にはめるとすべてがフルに使えるわけではないので、画に合わせるように構成し直したり、アレンジを若干し直したりしています。

――メロディを打ち出さず、ドライで硬質なサウンドを押し出す音楽演出を積極的に採られています。

誰もが知っている“ゴジラ”という大きくてしっかりとした土台がありますので、説明過多な音楽はかえってこの映画の質感を幼稚にしてしまう気がしました。状況を説明する、怖がらせるといった目的の音楽は、逆に緊張感、昂揚感、恐怖感などを消してしまいますから。今度のゴジラ映画にはそれは合わないし、今の時代にもふさわしくない。ドキュメンタリー映画を観ているかのような、かつて本当にこんなことが起こったのではないか、という恐怖心が観客の方々の感情に出てくる音楽演出にしたかったんです。感情をわかりやすくなぞったり、フォローするような音楽は極力控えました。



――ゴジラの登場場面で伊福部昭さんの楽曲が流れたあと、ゴジラが熱線で銀座の街を崩壊させるくだりでの響き（「Despair 絶望」）が今作の佐藤さんのゴジラのテーマと受け取りました。その前、ゴジラが海上で「高雄」を破壊する箇所でも奏でられます。

もちろん伊福部先生の曲がゴジラの主題曲なんですが、僕の曲で敢えてゴジラのメインテーマにするのだとしたら、あの曲だろうな、と思っていました。恐ろしい対象でもあるし、崇高な存在でもある。“怖い”だけだったらゴジラの音楽として表現できないですし、神々しさという感覚は恐怖とは対極でしょうが、同居できるような音楽はゴジラに合うだろうな、というイメージがありました。伊福部先生の楽曲は新録をしています。従来の編成とは若干違いますが、なるべく原曲に忠実に作り直しています。

――その鳴りと対峙するのが、「震電」の初登場場面、敷島が「震電」でゴジラに向かっていくところ、「海神作戦」のクライマックス、エンドロールを飾る「Resolution 決意」ですね。

「Despair 絶望」がゴジラ側だとすると、敷島の覚悟、決意の場面につけた「Resolution 決意」が人間側となります。ただし、僕としては、メロディが印象的とかいうのではなく、感じてもらうだけでいいような音楽を作りたかったんです。伊福部先生の曲がどっしりと軸を作って、他の曲は無意識のうちに体の中に染み入っていくような「聴く音楽」ではなく「感じる音楽」を書いたつもりです。

――従来のゴジラ映画音楽とは明らかに次元の異なる音楽世界が築かれました。

土台やコンセプトがしっかりしていれば、実は音楽は色々なチャレンジが許されます。この映画にはそれがあります。それで少しも迷いなく、あれほど振りきって音楽が書けたのだと思います。

（取材・文：小林 淳）

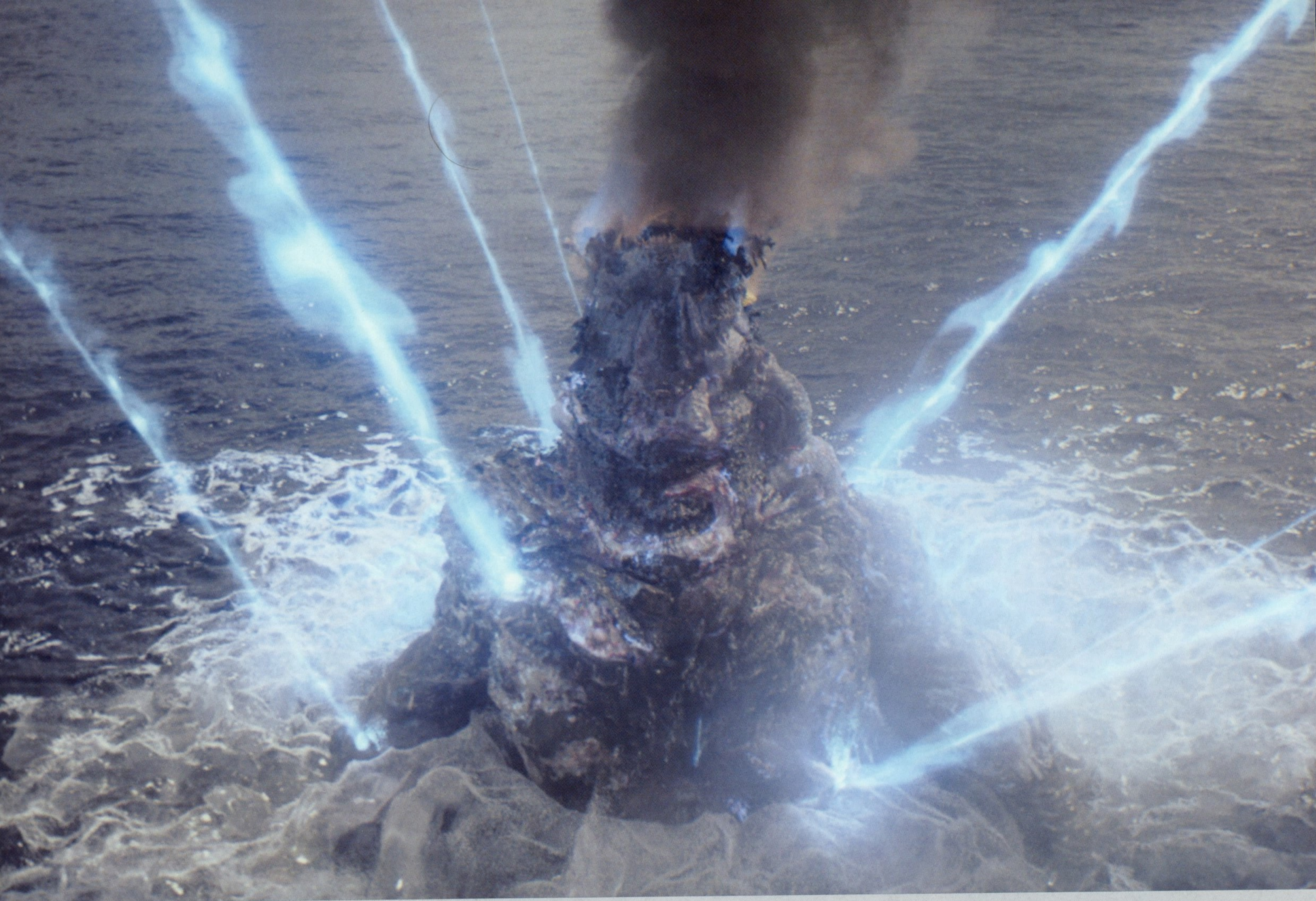
オリジナル・サウンドトラック「ゴジラ-1.0」



【国内盤CD】
品番：RBCP-3502
価格：2,750円（税込）
2023年11月4日（土）
発売予定

【国内盤LP】
品番：RBJE-2089
価格：7,700円（税込）
2023年12月15日（金）
発売予定

発売元：ランブリング・レコーズ







スタッフプロフィール

エグゼクティブ・プロデューサー

臼井 央

1978年生まれ、静岡県出身。2001年、東宝に入社。『マリと子犬の物語』(07)からプロデューサーを務め、『僕等がいた　前篇/後篇』『悪の教典』(12)、『君の膵臓をたべたい』(17)、『検察側の罪人』(18)などを手掛ける。エグゼクティブ・プロデューサーとして、『シン・ウルトラマン』『ゴーストブック　おばけずかん』『アキラとあきら』『百花』(22)、『怪物』(23)などを担当。

エグゼクティブ・プロデューサー

阿部秀司

1949年生まれ、東京都出身。86年に映像制作会社ROBOTを設立。2010年3月に退職し、創業者・顧問に就任。同年7月、阿部秀司事務所を設立。山崎貴監督作品すべてのエグゼクティブ・プロデューサーを務めているほか、『RAILWAYS』シリーズ(10・11・18)など、多くの映画を製作。『ALWAYS　三丁目の夕日』(05)で藤本賞・特別賞、エランドール賞を受賞。『永遠の0』(13)、『STAND BY ME ドラえもん』(14)で藤本賞を受賞している。

企画・プロデュース

山田兼司

1979年生まれ、埼玉県出身。慶應義塾大学法学部政治学科卒業。テレビ朝日にてプロデューサーとしてドラマ「BORDER」シリーズ(14・17／EX)、「dele」(18／EX)などを手掛け、2度の東京ドラマアウォード優秀賞をはじめ、ギャラクシー賞を3度受賞。2019年に東宝に移籍。複数の映画作品をプロデュースし、最新作『怪物』(23)でカンヌ国際映画祭脚本賞・クィアパルム賞を受賞。

企画・プロデュース

岸田一晃

1991年生まれ、大阪府出身。関西学院大学社会学部卒業後、東宝に入社。『君の膵臓をたべたい』(17)でアシスタントプロデューサーを務め、以降はプロデューサーとして『OVER DRIVE』(18)、『君は月夜に光り輝く』(19)、『アルキメデスの大戦』(19)、『弥生、三月-君を愛した30年-』(20)、『思い、思われ、ふり、ふられ』(20)、『ゴーストブック　おばけずかん』(22)、『今夜、世界からこの恋が消えても』(22)、『ブラックナイトパレード』(22)などを手掛けた。

プロデューサー

守屋圭一郎

1968年生まれ、神奈川県出身。2001年、ROBOTに入社。同社映画部のプロデューサーとして多くの作品に関わる。主なプロデュース作品に、『タイヨウのうた』(06)、『重力ピエロ』(09)、『映画 鈴木先生』(13)、『3月のライオン　前編/後編』(17)などがある。『ALWAYS　三丁目の夕日』(05)から『ゴーストブック　おばけずかん』(22)まで、ほぼすべての山崎貴監督作品に関わっている。

プロデューサー

阿部 豪

1978年生まれ、神奈川県出身。ROBOTに入社し、制作担当として『BRAVE HEARTS　海猿』(12)、『カノジョは嘘を愛しすぎてる』(13)、『永遠の0』(13)を担当した後、ラインプロデューサーとして『海賊とよばれた男』(16)、『DESTINY 鎌倉ものがたり』(17)、『アルキメデスの大戦』(19)を担当。プロデューサーを務めた作品に『ゴーストブック　おばけずかん』(22)などがある。

ラインプロデューサー

櫻井紘史

1982年生まれ、群馬県出身。フリーの制作部として、『BALLAD 名もなき恋のうた』(09)から山崎貴監督作品に参加し、その後も『永遠の0』(13)、『海賊とよばれた男』(16)、『DESTINY 鎌倉ものがたり』(17)、『アルキメデスの大戦』(19)、『ゴーストブック　おばけずかん』(22)など数多く担当。現在はROBOTに入社し、プロデューサーを務める。

撮影

柴崎幸三

1958年生まれ、栃木県出身。日本大学芸術学部映画学科卒業。『ザ・中学教師』(92)が劇映画デビュー作。『毎日が夏休み』(94)で第38回三浦賞を受賞。『ジュブナイル』(00)から山崎貴監督とコンビを組み、第29回日本アカデミー賞最優秀撮影賞を受賞した『ALWAYS　三丁目の夕日』(05)や、同賞・第38回の最優秀賞に輝いた『永遠の0』(13)など、実写作品で多くを担当している。

照明

上田なりゆき

1954年生まれ、熊本県出身。『ウンタマギルー』(89)で照明技師としてデビュー。『月はどっちに出ている』(93)、第22回日本アカデミー賞最優秀照明賞を受賞した『愛を乞うひと』(98)を担当した後、『ジュブナイル』(00)から山崎貴監督作品に参加。『永遠の0』(13)でも第38回日本アカデミー賞最優秀照明賞に輝いている。他に『いま、会いにゆきます』(04)、『空中庭園』(05)、『孤高のメス』(10)、『閉鎖病棟　―それぞれの朝―』(19)など。

上條安里
美術

1962年生まれ、東京都出身。85年、サンク・アール入社。CMの美術を担当した後、『7月7日、晴れ』(96)で映画美術に初参加。山崎貴監督作品には『ジュブナイル』(00)以降、ほとんどの実写映画で美術を手掛け、『ALWAYS 三丁目の夕日』(05)と『永遠の0』(13)で日本アカデミー賞最優秀美術賞を受賞。また、『バケモノの子』(15)、『竜とそばかすの姫』(21)などアニメ作品の美術設定も担当。

龍田哲児
装飾

1968年生まれ、大阪府出身。『スウィートホーム』(89)の特機助手として初めて映画に携わり、『八月の狂詩曲』(91)の小道具、『静かな生活』(95)、『HANA-BI』(98)の装飾助手を経て、『ざわざわ下北沢』(00)から装飾を担当。山崎貴監督作品には『Returner リターナー』(02)から参加し、以降はほぼすべての実写映画の装飾を担当。他に『海猿 ウミザル』『血と骨』(04)、『あの頃。』(21)、『とんび』(22)など。

竹内久史
録音

1978年生まれ、東京都出身。録音技師としての主な作品に『味園ユニバース』(15)、『金メダル男』(16)、『ちはやふる -結び-』『君が君で君だ』『ハード・コア』(18)、『デイアンドナイト』『見えない目撃者』(19)、『映像研には手を出すな！』(20)、『くれなずめ』(21)、『ちょっと思い出しただけ』『女子高生に殺されたい』『ゴーストブック おばけずかん』(22)などがある。

奥田 悟
特機

1967年生まれ、神奈川県出身。山崎貴監督のすべての実写映画で特機を務めている。その他の担当した作品に、『愛を乞うひと』(98)、『真夏の方程式』(13)、『舞妓はレディ』(14)、『世界から猫が消えたなら』(16)、『忍びの国』(17)、『SUNNY 強い気持ち・強い愛』(18)、『AI崩壊』(20)、『いのちの停車場』(21)、『ホリック xxxHOLiC』(22)などがある。

宮島竜治
編集

1967年生まれ、神奈川県出身。編集技師・谷口登司夫に師事し、『ロマンス』(96)で編集技師としてデビュー。『スウィングガールズ』(04)、『ALWAYS 三丁目の夕日』(05)、『永遠の0』(13)で日本アカデミー賞最優秀編集賞を受賞。山崎貴監督のほぼすべての実写作品で編集を務めているほか、『すばらしき世界』(21)、『マイ・ブロークン・マリコ』『土を喰らう十二ヵ月』(22)などを担当。

石山将弘
カラリスト

1985年生まれ、茨城県出身。ポストプロダクションでのカラリストを経て、2021年に亀井俊貴と日本初のカラーグレーディング専門スタジオ、ARTONE FILMを設立。映画や、Netflixオリジナル作品、CMのカラリストとして活躍。主な担当作品に『ゴーストブック おばけずかん』(22)、『ちひろさん』『最後まで行く』『リボルバー・リリー』(23)、Netflixドラマ「First Love 初恋」(22)、「サンクチュアリ -聖域-」(23)などがある。

井上奈津子
音響効果

1985年生まれ、広島県出身。これまで音響効果担当として、『金メダル男』『ぼくのおじさん』『裏切りの街』(16)、『ハード・コア』(18)、『惡の華』(19)、『ずっと独身でいるつもり？』(21)、『さがす』『女子高生に殺されたい』『ホリック xxxHOLiC』『モエカレはオレンジ色』『ゴーストブック おばけずかん』『窓辺にて』(22)、『炎上する君』(23)などを手掛けている。

藤村義孝
選曲

1965年生まれ、鹿児島県出身。これまで選曲担当として、『踊る大捜査線』シリーズ(10・12)、『SP 革命篇』(11)、『ストロベリーナイト』『真夏の方程式』(13)、『HERO』(15)、『マスカレード・ホテル』『マチネの終わりに』(19)、『劇場版ラジエーションハウス』『ゴーストブック おばけずかん』『沈黙のパレード』『カラダ探し』(22)、『湯道』(23)など、多数の作品を手掛けている。

宮内三千代
ヘアメイク

鹿児島県出身。ベレッツア スタジオ所属。山崎貴監督作品では『ALWAYS 三丁目の夕日』シリーズ(05・07・12)、『SPACE BATTLESHIP ヤマト』(10)、『永遠の0』(13)、『海賊とよばれた男』(16)、『アルキメデスの大戦』(19)、『ゴーストブック おばけずかん』(22)などを担当。他に『HANA-BI』(98)を始めとする北野武監督作や、『さかなのこ』『PLAN 75』(22)など。

水島愛子
衣裳

1977年生まれ、東京都出身。『明日があるさ THE MOVIE』(02)のスタイリストを務めたのち、衣裳として映画『ALWAYS 三丁目の夕日』シリーズ(05・07)、『K-20 怪人二十面相・伝』(08)、『永遠の0』(13)、『海賊とよばれた男』(16)、『DESTINY 鎌倉ものがたり』(17)、『アルキメデスの大戦』(19)、『キネマの神様』(21)、『こんにちは、母さん』(23)、TVドラマ「海猿 UMIZARU EVOLUTION」(05／CX)、「24 JAPAN」(20〜21／EX)などを担当。





敷島浩一　神木隆之介

大石典子　浜辺美波

水島四郎　山田裕貴

堀田辰雄　田中美央
齋藤忠征　遠藤雄弥
板垣昭夫　飯田基祐
明子　永谷咲笑

阿南健治　水橋研二

須田邦裕　谷口翔太
中台あきお　佐々木一平
中村織央　鰐渕将市
西垣　匠　佐々木風磨

長部　努　小松勇司
三濃川陽介　日下部千太郎　川端康太　古堅元貴
吉川裕斗　大島祐也　赤妻洋貴　濱中　遼

荒谷清水　塚本幸男　大宮将司
マイケル・アリアス　松原正隆　古山憲太郎

松井　工　平原テツ　鳥谷宏之　千葉誠太郎
小熊　樹　間瀬英正

大西　遵　持永雄恵　市川大貴　太田靖則

野田健治　吉岡秀隆

土橋竜太　斉藤　淳　山田将之
佐藤五郎　藤田啓介　若林佑太　福田航也
杉崎シュンペーター　高尾悠希　苅田裕介　松本　誠

長島慎治　山本晃大　山田英彦　伊藤亜斗武
山田ジャンゴ　保里ゴメス

阿部翔平　嶋田　彦　木原勝利　矢作マサル
俵木藤汰　原田悦嗣　仲城煎時　明樂哲典

大野真緒　北御門亜美　羊　華　得田舞美
植田倖瑛　鶴田　翔　荒木　誠　相澤大翔
長谷川瑞己　井上喜介　未来みき　阿部大地
三浦理香子　剛　州　小野瀬侑子　奥田誠治

声の出演
篠井英介　笠井信輔
早　織　米本学仁　仲　義代
殖田育夢　千葉恵太　中野匡人　内田　清
桜　彩　加茂井彩音　三宅里沙　青木真美

オフィス・ボーダレス　スターエースプロダクション　株式会社1カラット　ミライピクチャーズ　STORM RIDER
アマックスミュージック　テアトルアカデミー　浅井企画　劇団いろは　レイ・グローエンタテインメント
FIDES 合同会社　ビッグファイタープロジェクト　ワタナベエデュケーショングループ　スペースクラフトジュニア
CASTY　芸優　株式会社エーミュージック　Glanz entertainment　ミューズ　ジョビィキッズ
クラージュキッズ　Orionsbelt Global　芸プロ☆FLT　株式会社トレジャーハート
麗タレントプロモーション　Yプロダクション/茨城

橘　宗作　青木崇高

太田澄子　安藤サクラ

秋津清治　佐々木蔵之介

製作　市川　南

エグゼクティブ・プロデューサー　臼井　央
阿部秀司

企画・プロデュース　山田兼司
岸田一晃

プロデューサー　阿部　豪
守屋圭一郎

協力プロデューサー　上田太地
山内章弘

チーフゴジラオフィサー　大田圭二

ラインプロデューサー　櫻井紘史
VFXディレクター　渋谷紀世子
撮影　柴崎幸三
照明　上田なりゆき
美術　上條安里
装飾　龍田哲児
録音　竹内久史
特機　奥田　悟
編集　宮島竜治
カラリスト　石山将弘
音響効果　井上奈津子
選曲　藤村義孝
衣裳　水島愛子
ヘアメイク　宮内三千代
キャスティング　杉野　剛
スクリプター　阿保知香子
助監督　安達耕平
制作担当　横井義人
プロダクション統括　會田　望

監督助手　工藤将亮　安部孝明　角屋拓海　坂井孝太朗　石川恭彰
演出部準備応援　水野貴之　宮本紘生
劇中モンタージュ監修　マイケル・アリアス
演技事務　中澤美波
エキストラ担当　安藤服瑞子
Bカメラ　岡田利宇
撮影助手　山本翔太　加納元貴　酒井　馨　清水大河　織田知樹
特機助手　牧志結美　佐藤遥香
WIND EFFECT OPERATOR　後藤泰親　野川勝二



照明助手	赤羽 剛　金谷真人　澤村圭佑　窪田大輔
	川原大輝　森 直寿　田中千晶
録音助手	大堀太輔　豊田晃司　深田絵理佳
美術助手	平井 亘　佐藤英樹　三浦真澄　古城奈央子　中山順嗣
	田中 涼　力士風香　島内 蛍　西 優伽
組付き大道具	高木智之
木工	百瀬久寿
造形	井上修次
鉄道具	大澤克俊
鉄道具助手	石渡光時　内川 靖　大澤弘俊
震電計器板制作	中村泰三
装置	鍵和田正樹
装飾助手	前屋敷恵介　新谷友和　野田純平　羽場しおり　林 杏奈
	木次小春　山田真太郎
小道具	中川由衣　森田桜子
小道具造形	武富洸斗
小道具助手	松林夏美
作り物	平野藍子
縫製	やぐち水鳥
字書き	尾山由記
フードコーディネイター	片山 彩
衣裳助手	白井 恵　伊藤凪沙
ヘアメイク助手	高見 唯
車輌	廣川 靖　酒井剛介
照明機材担当／DMXオペレーター	大柿 結
照明機材担当	徳弘 崇
制作主任	山田哲也　前場恭平　菅井俊哉　福田裕矢
制作進行	三島研一郎　藤原桃香　梁井寿太郎　野嵜百香
衛生班	坂本有里
AP(衛生担当)	藤澤彩夏
制作デスク	熊谷礼美　高橋曜子
操演・特殊効果	宇田川幸夫
操演・特殊効果助手	黒田政紀　辻川明宏　高橋ひと美
ドローンオペレーター	福山武治
ドローンカメラオペレーター	佐藤哲明
スタントコーディネイター	小池達朗
スタント	宮木ヨシオ　坂手透浩　八尾宗徳　藤田啓子　佐川正治
	岡本正仁　三住敦洋　松上順也　野貴 葵　永島美佐子
	菅 真紀　北野 淳　仲 龍仁　永友 勇　橋本浩人
	矢島一憲　平野兼椰　濱谷和輝　山本 夢　野川瑞穂
	杉本佳幹　橋渡竜馬
ガンエフェクト	納富貴久男　片岸雅浩　近藤 力
照明部応援	濱田研一　打矢祐規　福吉麟太郎　近松 光　大庭稔彦
	山﨑 豊　小西章永　山田貴也　菅原陽一郎　藤井聡史
	根本伸一　福地賢治
録音部応援	赤澤靖大　宮崎花菜　秋元大輔　三木雄次郎
特機部応援	上野隆治　大澤元洋　後藤広也
美術部応援	有馬佐世子　大月由香里
大道具	綿引一也　坂巻直人
塗装	藤田索深　佐藤貴子　小林英之
建具	木村真之
造園	白井 誠
装飾部応援	安達也称　秋山希実　山本 健
小道具応援	武田恭子　奥田七琉
フードコーディネイター応援	菊地実幸　伊波あゆみ　建石陽介
軍事監修(海神作戦考案)	後藤一信
船舶監修	播田安弘
掃海監修	相澤輝昭　河上康博
零戦監修	宮崎賢治
震電・艦艇所作指導	土肥 修
軍事所作指導	越 康広　長谷部浩幸
ゴジラデザイン	山崎 貴　田口工亮
特殊メイク・造形	吉田茂正
特殊メイク・造形助手	大野愛美　平林 諒　河野真起子
衣裳応援	松田和夫　豊嶋ゆう子　大城志帆　根岸亜未
ヘアメイク応援	ベレッツア スタジオ
エキストラ担当応援	渡辺卓人　中川和博　田谷幸子　発智新太郎　遠藤 薫
車輌応援	秋山 清　名田仙夫　菊池有治　高沼正幸
制作部応援	高見明夫　森田博之　金子俊之　貴船あかり
衛生班応援	石田ちひろ　熊谷千裕　下﨑綾香　山﨑 遥　安藤 梓
現場警備	ホースト亜希子
救護班	依田茂樹　西村 忠　池上吾郎
感染予防指導	宮川義隆
制作部サポート	川島貴雄　後藤亜寿香　田中義明　千田英樹
	坪元健一　眞志取兼次　水野 浩　吉澤和幸
制作部インターン	荻原 丈　吉崎大雅
装飾部インターン	山田雄貴　岩崎珠巳
制作経理	大槻厚史　須藤哲史　近藤睦朗
制作管理	山田祥子　西野智也
編集助手	小林美優　菅原あかり
タイトル	津田輝王　関口里織
Color Finish by ARTONE FILM	
アディショナルカラリスト	有賀 遼
フィニッシングエディター	小林祐五
コンポジター	伊藤那奈
技術統括	二神真一
DIアシスタント	川村真唯
DIプロデューサー	呉 雪那
DIコーディネーター	島 健太郎
IMAGICA	
テクニカルディレクター	小越 将
データコンフォーム	松尾経子
デジタルシネママスタリング	新谷 彩
ラボコーディネイト	永海彩弥野
ラボマネジメント	岡田浩二
データマネージャー	鈴木康公
音楽	佐藤直紀
	伊福部 昭「ゴジラ」「モスラ対ゴジラ」「キングコング対ゴジラ」

「とんがり帽子」
川田正子　ゆりかご会
作詞：菊田一夫　作曲：古関裕而

音楽プロデューサー　成川沙世子
選曲助手　岩尾亮太

音楽制作協力　荒木浩三
Recording & Mixing Engineer　長谷川 巧
Assistant Engineer　安藤 翔　椎葉 爽
Recording Studio　AVACO STUDIO
SOUND INN STUDIOS
Music Copyist　藤川千愛
Musician Coordinator　納屋和貴

音響効果応援　柴崎憲治
フォーリーエディター　赤澤勇二
フォーリーアーティスト　大河原 将　勝亦さくら
原 虹歩　佐々木淳一
フォーリーミキサー　下總 裕　土屋元気

VFX
白組

3DCGディレクター　髙橋正紀
シニア3DCGアーティスト　植木孝行　早﨑達矢　山口拓洋　山口拓史　松本 圭
3DCGアーティスト　長谷川界斗　金原凌央　中倉寛隆　佐藤昭一郎
モデリングアーティスト　田口工亮　杉山和隆　岩田貴文　山田基寛　酒向純平
上西琢也　三宅智之
セットアップアシスト　有海風思　YI SANGHUN
リードエフェクトアーティスト　安藤隼也
エフェクトアーティスト　三宅真司　風巻 誠　鈴木勝巳　野島達司　早﨑達矢
戸梶雅章
CO.VFXディレクター　舟橋 奨
コンポジター　小高慶人　大久保榮真　松元 遼　野島達司
佐藤昭一郎　江村美香　鈴木信也　武坂耕二
ミニチュアメーカー・ゴジラマケット制作　元内義則　佐々木利佳
ミニチュアシューティングクルー　細山正幸　菅波 純
システムエンジニア　早川胤男　濱中卓也　八木大輔　杉山隆志
藤井晴信　入田尭光

Fude
マットペインター　江場左知子　白浜武之

CHOTOTU
アニメーター　河原佑樹　坂本 洋
リギングアーティスト　千野勝平　正木俊彦

SQUARE ENIX
ジェネラル・マネージャー　野末武志
リードモーションキャプチャーアーティスト　久米信明
モーションキャプチャーアーティスト　柴崎 巧　新川弘之
長迫晃希　宮崎裕司
谷口友央貴
モーションキャプチャーコーディネーター　佐藤矩生　杉山春香
モーションキャプチャーエンジニア　沼田裕也　清水洋杜

L'espace Vision
3Dスキャンプロデューサー　久保江陽介
3Dスキャンスーパーバイザー　中島俊彦　長嶋秀訓　内海 航

株式会社神戸清光
3Dスキャンプロデューサー　走出高充
3Dスキャンマネージャー　岡本勝彦
ドローンパイロット　大町昌嗣　山元慎也
PRマネージャー　松本 葵

3DCGデータ協力　原田敬至　松野正樹　松野有記　鹿野雄一　ffish.asia
ツール開発協力　倉田良太

東宝スタジオコーディネート　中島 剛　渡部岳史　早坂隼人
立川千秋　早川文人　西野尾貞明
スタジオエンジニア　佐野優介
テクニカルサポート　加々美 守　天木佑樹　越 真一郎

宣伝プロデューサー　大竹隆道　林原祥一
メディアプロモーション　伊藤圭祐　宮下郁也
パブリシティ　山本剛弘　細尾早霧　森 菜那
広告制作　橋内利沙
グラフィックデザイン　細川寿樹　神崎 茜　大城 仁
グラフィックレタッチ　大谷キミト
コピーライター　佐藤潤一郎
予告編制作　蔦川亜希
予告編演出　壽崎 誠　嵐 悠太
スチール　工藤勝彦
メイキングディレクター　大場嵩之　松本淳一
宣伝渉外　山口泰弘　小塚雅也　藤原拓也　木村優太
公式サイト制作　澤井真吾　梅津秀佑
公式SNS　加賀美頌　堂園あゆみ
中部宣伝　市原 透
西村公佑　尾﨑 純　篭橋勘太
関西宣伝　橋本尚香　沖田宗二郎　網本健人
九州宣伝　小倉良介　田中ありさ　髙橋一誠
北海道宣伝　松成憲二　白﨑誠治

ゴジラルーム　吉川哲矢　山中和成　山﨑倫明
石黒裕亮　宮崎 豪　岩田誉生
斉藤奈緒子　田渕恭兵　勝見泰介　菅野充夫　加藤 凱

ゴジラ戦略会議　髙橋亜希人　吉川哲矢　山﨑倫明　清水俊文　広瀬 真
村川円吾　中嶋博明　有田武将　東 幸司　大竹隆道
森 陽香　海野航平　河田次郎　郷右近弘己　七栗優太朗
村山友優　松本奈美

衣裳協力
LIUGOO
BIG STONE　Top of the Hill　WHISTLER　JAM　de:3igh R　PRESS ROOM

ヘアメイク協力
ETVOS　ITO　mm　DEVIL　loretta　SHISEIDO PROFESSIONAL
株式会社ロージーローザ　Sutto!　サンクルルージュ　LINEASTORIA

美術協力
CINQART　尚建設株式会社　株式会社紀和美建　株式会社和泉園　Togura 戸倉商店
大谷石石材協同組合　株式会社 高橋佑知商店　株式会社小方組　有限会社 光製作所
恵積興業株式会社　イイジマエクステリア　カセツリース株式会社
マーブリングファインアーツ　有限会社雅組総合建設　有限会社吉田美術
西郷農園　スズキガーデン　株式会社有村Green　宇佐市平和資料館

装飾協力
タカラヤ古民具骨董館　軍医少尉の資料館　アトリエKAWA-C　アンティークマーケット吹上
日酸TANAKA株式会社　株式会社世田谷酸素商事　ニチベイ　ASWAN
豊川市教育委員会 生涯学習課　EAST JAPAN MACHINE PLAZA　MATSUSHITA SHARYO　KTC　予科練平和記念館
筑前町立大刀洗平和記念館　筑波海軍航空隊記念館　小島正喜　宇佐美宏之　報國515資料館
原 知崇　フラマント映画社 坂井田 満治　橋本哲男　牧田良秋　TOKAI KINZOKU　EVERCLEAN　栄正印刷有限会社
株式会社タカチ電機工業　SWEETROAD　アンティーク コットン・テール　SIBERIA　大井手 亮太　天牛書店
深川製磁　川島商事株式會社　クリーンビューティー山本　BBS
昭和ハウス　高津装飾美術　佐塚慎吾　髙橋和行　瀬戸内市

撮影機材協力
Shot On Sony CineAlta　VENICE　dji PRO

録音機材協力
サウンドデザインユルタ　インフィニティサウンド

ポストプロダクション協力
ZOZOMARINE STADIUM　AR Finder　GEN MODELS　日本工学院八王子専門学校
一畑電車株式会社　長澤洋一郎　システムサイエンス　明石発動機工作所
38912 DIGITAL　テラオカ マサヒロ

ロケーション協力
茨城県いばらきフィルムコミッション　プロジェクト茨城　笠間市フィルムコミッション
筑波海軍航空隊記念館　茨城県美浦村　ちくせいロケーションサービス
下館総合体育館　上平塚自治会　長野県岡谷市　（公財）おかや文化振興事業団
岡谷商工会議所　諏訪圏フィルムコミッション　CANORA HALL　千葉県フィルムコミッション
鴨川市　鴨川市教育委員会　鴨川市商工観光課　吉浦 海辺のキャンプ場　株式会社And Nature
プライベートオーシャンヴィラ藍水　吉浦区の皆様　鈴木 勉　田中芳雄　佐藤惠重
ロケーションナビ・にしお　東幡豆漁業協同組合　民宿鈴喜館　高須組
DAY NITE　浦賀ドック(横須賀市)　Velasis　MSC

撮影協力
とよはしフィルムコミッション　LOISIR HOTEL ロワジールホテル豊橋　大一青果株式会社
IMAI 今井建設株式会社　アンティークホテルら・みらどーる　ちっくタック
E-1 株式会社イーストワン・レンタカー　東海旅客鉄道株式会社リニア・鉄道館
株式会社エアープランツ・バイオ／ゲノムサイエンスラボ登録衛生検査所　海要丸　忠ちゃん牧場

劇用車協力
モト・シルバーライン/和久井誠　徳田輪業　ガレージ商会小嶋　前田オート　鈴木商店

海上ロケ協力
Bell Marine ベルマリン株式会社　鈴木雅紀
七海丸 岡田昌彦　美波丸 大鐘崇司　哲遊丸 井谷哲也　龍栄丸 大杉栄典
ブルージャンキー
和幸船舶　安井和弥　村井亮磨
第二吉祥　松浦新太郎　池田雄介　川人健司

サポートダイバー　中川幸生
株式会社辰也造船所　宗田造船株式会社　Yamaha Marina Hamanako ヤマハマリーナ浜名湖
Andante24　遠州漁業協同組合　はままつフィルムコミッション
浜名漁業協同組合　公益財団法人 浜名湖総合環境財団

プロダクション協力
東宝スタジオ　東宝ポストプロダクションセンター　東宝ミュージック　東宝映像美術
sanwa CINE EQUIPMENT　日本照明　NKL　CINQART　株式会社オリーブ・アート
松竹衣裳　ベレッツア スタジオ　SIG EFFECTS　ALPHA STUNTS
Osawa　SKY-VIEW　ARTONE FILM　IMAGICA ENTERTAINMENT MEDIA
フェイスミュージック　SPOT　コマンドZ　アンシブルタイトル
三映の台本　ビッグファイタープロジェクト　BIG SHOT　Playful・Sound
TANAKA WORKS　VIVO　文化庁委託事業 映画スタッフ育成プロジェクト　Famiu

取材・資料協力

海上自衛隊　海上保安庁

新聞提供　読売新聞社

archival footage courtesy of Periscope Film / 写真　w_p_o / イメージマート

鶴野正英　渡辺鉄工株式会社　JMU JMUディフェンスシステムズ株式会社　森 泰二　坂本 仁

日本折紙協会　J.フロントリテイリング史料館　車両史編さん会　東京都交通局　板橋祐己

正光院　しょうけい館(戦傷病者史料館)　株式会社鳴美　富士フィルム株式会社　郵政博物館

全日本クラシックカメラクラブ　山田慎也　株式会社サッポロライオン　KONICA MINOLTA

FUKADA SALVAGE　鉄道被服研究会　東京大学アイソトープ総合センター 助教 桧垣正吾

古田英明　横浜国立大学名誉教授 根上生也　横浜国立大学教授 田中良巳

DAIKIN　大和ミュージアム　甲飛喇叭隊　第十一分隊　坂井田洋治

工藤恵康　KOKUYO　佐藤飛鳥　たいみち　ナガイレーベン株式会社

ニチバン　東邦大学　日本赤十字社　日本ラジオ博物館　有限会社三景

ウィンダムネクスト新橋店　タマヤ計測システム株式会社　不二技術研究所

印西市立印旛医科器械歴史資料館　TOKYO KEIKI　報國515資料館　笹原 大

制作協力

阿部秀司事務所

VFXプロダクション

白組

制作プロダクション

TOHOスタジオ

ROBOT

監督・脚本・VFX　山﨑　貴

映倫 123583



godzilla-movie2023.toho.co.jp
2時間5分／シネマスコープ
発行日：2023年11月3日
発行者：大田圭二
発行所：東宝株式会社ライツ事業部 東京都千代田区有楽町1-2-2
編集：株式会社東宝ステラ 東京都千代田区有楽町1-7-1
デザイン：神崎 茜（TOHOマーケティング株式会社）
取材＆文：金澤 誠
印刷所：成旺印刷株式会社 東京都千代田区神田神保町3-5
定価：1100円【税抜本体価格1000円】

www.toho.co.jp

2023年10月20日現在の情報をもとに編集・制作をおこないました。

ゴジラ70周年記念作品『ゴジラ-1.0』本編のウラ側すべてを閉じ込めた完全記録集が発売決定！

「The Record of G-1.0」

東宝が、ゴジラ70周年記念作品、そして国産実写30作目記念作品として満を持して製作し、今まさに全世界の注目を浴びている『ゴジラ-1.0』。本作はいかにしてつくられたのか？ 2019年の企画初期から、制作過程、そして宣伝・公開までを膨大な秘蔵資料、実にスタッフ50名以上への取材とともに余すところなく記録。またVFXに関しては山崎貴監督とVFXディレクター渋谷紀世子監修のもとに誌面で制作過程を徹底解説。まさに本編のウラ側すべてを豪華仕様に閉じこめた永久保存版！

秘蔵資料

初期プロット、初期シナリオ、初期デザイン、ゴジラデザイン画の変遷、ゴジララフモデル、ゴジラ3D CGモデル、プリビズ多数、怪獣のリグ、ロケハン写真、大戸島演出プラン、バラック配置図、新生丸デザインプラン、銀座リサーチ資料、銀座街並み3DCG制作過程、実物大震電制作記録、劇中登場艦船(高雄・雪風・響)資料およびCG制作用図面、震電CG制作過程、艦船CG制作過程、ゴジラ成体および呉爾羅(進化前)スケール図、ゴジラ撮影用モック特写、衣裳・小道具特写、劇中登場書類特写、ロケ撮影記録写真、スタジオ撮影記録写真、撮影・照明プラン、海神作戦ゴジラ進撃プラン、山崎貴監督によるエフェクト演出案メモ、咆哮エフェクト、破壊エフェクト、CGコンポジット制作過程、CG各シーン完成までの完全解説、マット画、美術デザイン画、美術プラン3D図面、劇中使用ロゴマークデザイン、海面CG制作過程、グレーディングデータ写真、各種宣伝物、広告ほか、図版資料1,500点以上。

特別取材

監督・脚本・VFX
山崎 貴

エグゼクティブ・プロデューサー
阿部秀司

企画・プロデュース
山田兼司/岸田一晃

プロデューサー
阿部 豪/守屋圭一郎

ラインプロデューサー
櫻井紘史

音楽
佐藤直紀

撮影
柴崎幸三

照明
上田なりゆき

美術
上條安里

装飾
龍田哲児

録音
竹内久史

特機
奥田 悟

VFXディレクター
渋谷紀世子

編集
宮島竜治

カラリスト
石山将弘

音響効果
井上奈津子

衣裳
水島愛子

ヘアメイク
宮内三千代

助監督
安達耕平

監督助手
坂井孝太朗

演出部準備応援
水野貴之

スタントコーディネーター
小池達朗

軍事監修
後藤一信

船舶監修
播田安弘

掃海監修
相澤輝昭/河上康博

VFX
髙橋正紀
植木孝行/早﨑達矢
山口拓洋/山口拓史
松本 圭/長谷川界斗
金原凌央/中倉寛隆
田口工亮/杉山和隆
上西琢也/三宅智之
安藤隼也/三宅真司
風巻 誠/鈴木勝巳
舟橋 奨/小髙慶人
大久保榮真/松元 遼
野島達司/佐藤昭一郎
江村美香/武坂耕二
元内義則/佐々木利佳
細山正幸
早川胤男/濱中卓也
(以上、白組)
江場左知子/白浜武之
(以上、Fude)
河原佑樹/坂本 洋
(以上、株式会社CHOTOTU)



発行：東宝株式会社ライツ事業部
編集：株式会社東宝ステラ

初版限定特典
◯撮影現場でスタッフのみに配布された絵コンテ台本(復刻)
◯特製A2ポスター(四つ折り封入)

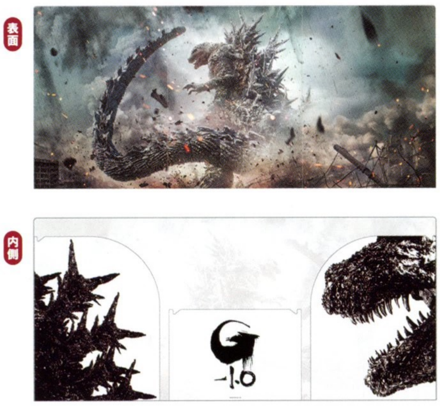
予価：13,200円(税抜本体価格12,000円)
ハードカバー上製本/三方背ケース/輸送用ダンボール入/A4版変形/全400ページ(予定)
発売予定日：2024年3月

好評予約受付中！
ゴジラ・ストア
GODZILLA STORE
https://godzilla.store/

＊仕様・内容等は変更の場合がございます。予めご了承ください。
＊お申し込み期間他詳細につきましてはゴジラ・ストアHPをご参照ください。



クリアファイルセット 600円
A4サイズ用　2種類1組



トリプルクリアファイル 660円
A4サイズ用　3ポケット仕様





ボールペン 880円
全長約15cm　フローティング仕様

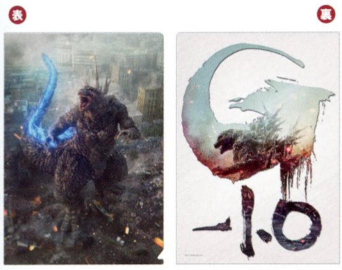




プロジェクターキーホルダー 880円
約13.5cm
ボタン電池（LR41）4個使用
※テスト用電池付き



スマートフォンリング 1,320円
ストラップ：
全長約13cm



メタリッククリアファイル 490円
A4サイズ用　メタリック仕様



メタリック下敷き 490円
B5サイズ　メタリック仕様（表のみ）



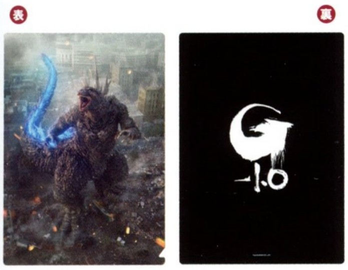
ネックストラップ 1,540円
ネック紐：全長約80cm
リール：取り外し可能
裏面クリップ付き



背びれキーホルダー 935円
全長約13.5cm



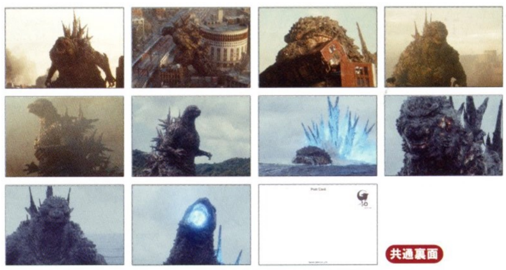
スマートフォンケース 2,200円
約9×16.5cm
※推奨スマートフォンサイズ：
約7×15×12cm以内



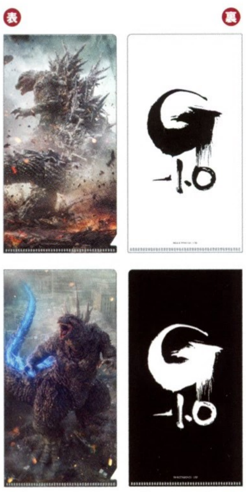
3Dクリアファイル 600円
A4サイズ用　3D仕様（表のみ）



バインダー 1,980円
A4サイズ用　内ポケット付き



ポストカードセット 660円
定型サイズ　10枚1組



チケットファイルセット 550円
約11×21cm　2種類1組



メガネケース 1,980円
約17×7×4.5cm
マイクロファイバー製
クリーナークロス付き



メッシュペンポーチ 1,100円
約21×11cm　チャーム付き



ピンバッジセット 880円
ロゴ：約3.5×3.8cm　ゴジラ：約3.6×4cm
2種類1組



ステンドグラス風しおり 1,210円
約5×14.2cm



レリーフキーホルダー 1,100円
約3.5×11cm　表面半立体



メダル 935円
直径約5cm
ケース付き



カードケース 1,870円
約11×7.5×1.5cm



ブックカバー 1,100円
文庫本用サイズ　チャーム付き



約10×9.3cm　約8.5×9.8cm　約5.5×10cm

ステッカーセット 550円
メタリック仕様　3種類1組



ビッグアクリルスタンド
1,980円
約17×20.4cm



アクリルスタンド
キーホルダーA
990円
約9.5×9.6cm



アクリルスタンド
キーホルダーB
990円
約12×9.3cm



ステンレスマグカップ
1,320円
直径約7.5cm　高さ約9cm
持ち手：カラビナタイプ



スコット付き
ャープペン
990円
全長約14.5cm



マスコット付き
ボールペン
990円
全長約14.5cm



マスコット
キーホルダー
1,210円
全長約12cm



回転キーホルダー　935円
全長約10cm（金具含む）



コースター　1,210円
直径約9cm
中の足跡プレートは取り外し可能です



グラス　1,210円
直径約7.5cm　高さ約8.5cm
転写プリント



ボトルキャップ
マスコット
935円
直径約3.2cm
全長約6.5cm



フォンタブ
ショルダーストラップ
1,210円
フォンタブ：約6×10cm
ストラップ：幅約1cm
全長約70cm
長さ調節機能付き



ミニタオル　660円
約25×25cm



パーカー　8,470円
刺繍仕様　Lサイズ
約身丈70×身幅53×
肩幅47×袖丈63cm



キャップ　2,530円
フリーサイズ
（頭周り約55～60cm）
刺繍仕様



エコバッグ　1,650円
約30×35×マチ12.5cm　持ち手：約5×16cm
オーロラ箔プリント



フェイスタオル　1,650円
約34×80cm



TシャツA（L / XL）
各3,300円
Lサイズ：約身丈74×身幅55×
肩幅50×袖丈22cm
XLサイズ：約身丈78×身幅58×
肩幅53×袖丈24cm



TシャツB（L / XL）
各3,300円
Lサイズ：約身丈74×身幅55×
肩幅50×袖丈22cm
XLサイズ：約身丈78×身幅58×
肩幅53×袖丈24cm



ボディバッグ
4,290円
約17.5×31×6cm
ワッペン：メタリック仕様
フロントポケット付き



トートバッグ
1,650円
約35×39×11cm



劇場限定 ムービーモンスターシリーズ ゴジラ（2023）
クリアラメブルー　3,520円
バンダイ「ムービーモンスターシリーズゴジラ（2023）」の劇場限定バージョン
本体色はクリアブルーでキラキラのラメ入りです
全高約15.5cm

価格は全て税込み（10%）です。画像は実際の商品とは異なって見える場合がございます。商品のデザイン・仕様は変更になる場合がございます。予めご了承ください。

ゴジラ-1.0

劇場商品通信販売のご案内

ご注文はゴジラ・ストアWEBサイトにてお受けいたします

ゴジラ・ストア
GODZILLA STORE

ゴジラ・ストア WEBサイト | https://godzilla.store/

※代金は商品代金+配送料ほか決済手数料を別途頂戴いたします。品切れの際はご容赦下さい。



驚異の満足度99%※

※当社による来場者アンケート調査結

ワールドクラスの超絶スリルがここに！

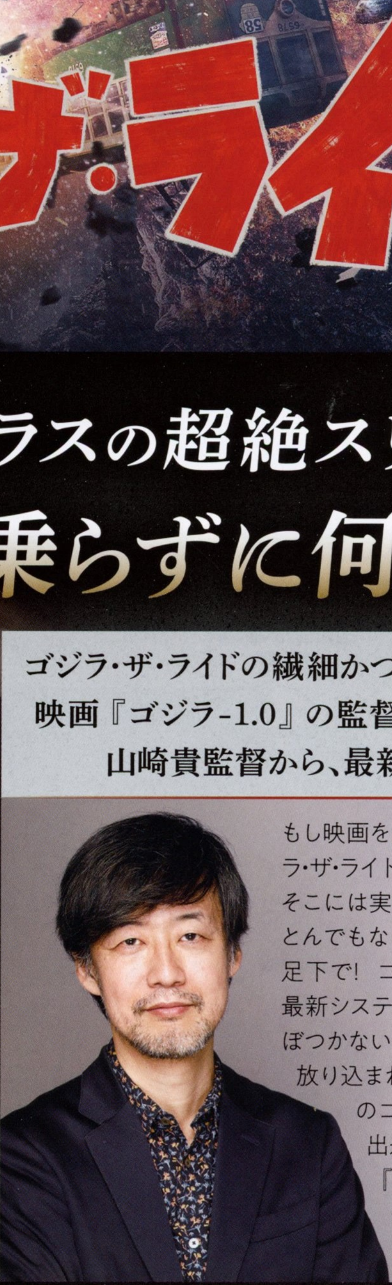
映画の後は、これに乗らずに何に乗る!?

常識ではありえない圧倒的なスケールとクオリティで、息つく暇もなく理不尽にゴジラやキングギドラたちがあなたに襲いかかる！本能を揺さぶるスリルがいつの間にか笑えてしまう、超絶大興奮の渦へと巻き込むライド・アトラクション！

VFX-JAPANアワード2023
ショートフィルム部門
最優秀賞 受賞
テーマパークのアトラクション史上初の快挙！

ゴジラ・ザ・ライド
特設サイトはこちら

ゴジラ・ザ・ライドの繊細かつ大迫力の映像を創り上げ映画『ゴジラ-1.0』の監督・脚本・VFXを手がけた山崎貴監督から、最新コメントをお届け！



もし映画を気に入ってもらえたなら、ぜひゴジラ・ザ・ライドも体験してみてください。
そこには実物大の怪獣バトルに巻き込まれるとんでもない興奮があります。すぐ目の前で！足下で！ ゴジラとキングギドラが戦います!!
最新システムで空中に突き出され、足下がおぼつかない全くの無防備な状態で激戦の中に放り込まれる衝撃は、ここ西武園ゆうえんちのゴジラ・ザ・ライドでしか味わうことは出来ません。
『ゴジラ-1.0』の興奮をそのままに、もう一つの恐怖に飛び込んでみてほしいと思います。

LIVE! 西武園ゆうえんち

東宝

東宝怪獣コレクション

TOHO MONSTERS COLLECTION

1/700 統一スケール!

あらゆる時代の東宝怪獣が待望の統一スケールフィギュアで蘇る!



コンプリートすると総勢60体以上の東宝怪獣ミュージアムが完成!

マガジンでは制作秘話など多彩な読みものを掲載。

マガジンには映画や登場怪獣の解説、製作の裏話、当時の貴重なゴジラグッズなど多彩な読みものを掲載。なかでも、造形師によるフィギュア解説は必見だ。さらに毎号、迫力ある怪獣ピンナップも付属する。



読者全員プレゼント!

創刊号～第23号のご購読で

刊行記念プレート

ここでしか手に入らないレアアイテム!



専用台紙にセットしてお届けします。

東宝作品に登場する中でも最も象徴的なゴジラ(1954)をデザイン!

[プレートサイズ] H89 × W63mm
[素材] ステンレス、ウレタン　[生産国]: 中国

※画像はイメージです。
※デザイン・スペック等は変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。

DeAgostini COLLECTIBLES

詳細・お申し込みはWEBまたはお電話で!

創刊号特別価格

990円 (10%消費税込)

第2号以降通常価格 2,699円(税込)

デアゴ 東宝怪獣　検索



0120-161-428
10:00 ～ 16:00 年末年始を除く

お電話でお申込みの際は必ず弊社Webサイト掲載「個人情報の取扱いについて」をご確認の上お申し込みください。
https://deagostini.jp/company/user/index.php


『ゴジラ-1.0』に登場するゴジラの
ソフビフィギュアが
玩具売場に現る！
商品の詳細はこちらからチェック
https://toy.bandai.co.jp/series/godzilla/item/
怪獣王シリーズ
怪獣王たるゴジラのダイナミックさにフォーカスし
超大型サイズで立体化した究極のソフビフィギュア。
超BIG
全高約245mm
ムービーモンスターシリーズ
MOVIE MONSTER SERIES
劇場作品に登場する
怪獣"モンスター"を
リアルな造形と
巧みな彩色表現で
再現したソフビフィギュア。
全高約155mm
ムービーモンスターシリーズ
ゴジラ(2023)
■価格:3,520円(税込) ■好評発売中
■対象年齢:3歳以上
怪獣王シリーズ
ゴジラ(2023)
■価格:7,150円(税込) ■発売日:2023年11月11日
■対象年齢:3歳以上
※画像はイメージです。※価格はメーカー希望小売価格です。※通信料はお客様のご負担となります。
※画像と商品とは多少異なりますのでご了承ください。※この広告の掲載内容は2023年11月時点のものです。
TM & © TOHO CO., LTD.

ガシャポン
HGシリーズ
東宝怪獣
約7.8cm
ガイガン(1972)
『地球攻撃命令
ゴジラ対ガイガン』
ゴジラ(2023)
『ゴジラ -1.0』
サンダ(1966)
『フランケンシュタインの怪獣
サンダ対ガイラ』
ガイラ(1966)
『フランケンシュタインの怪獣
サンダ対ガイラ』
ゴジラ HG東宝怪獣
2023年12月発売予定
500円(税込)
全4種
最新作『ゴジラ -1.0』のゴジラ含む、
人気東宝怪獣をラインナップ！
GODZILLA
究極東宝怪獣 ゴジラ
PREMIUM BANDAI
プレミアム バンダイ
GASHAPON DEPARTMENT STORE
キングコング対ゴジラ
『キングコング対ゴジラ』
(1962年)
約139mm
究極東宝怪獣 ゴジラ
『キングコング対ゴジラ』(1962年)
プレミアムバンダイにて
11月中旬受注開始予定
2024年2月発送予定
7,000円(税込)
詳しくはこちらから
https://p-bandai.jp/gashadepa/
ガシャデパ 検索
TM & © TOHO CO., LTD.
※画像はイメージです。※画像と商品とは多少異なりますので、ご了承ください。
バンダイお客様相談センター
https://www.bandai.co.jp/support/top
ナビダイヤル 0570-041-101
受付10時～16時(土日祝日、当社指定休業日を除く)
BANDAI

一番くじ
ichibankuji
一番くじ
ゴジラ-1.0
メーカー希望小売価格
1回900円
(税10%込)
D賞 ガーゼタオル
選べる全2種 約60cm
E賞 アクリルスタンドコレクション
選べる全6種 約6~7cm
B賞 背びれ プレート
全1種 約22cm
C賞 ゴジラデザインマグカップ
全2種 約8cm ※選べません
酒井ゆうじ氏
造形・彩色・プロデュース
によるSOFVICS!!
酒井ゆうじ超絶造形
酒井ゆうじ超絶造形コレクション
F賞 ブラックタンブラー
全6種 約12cm ※選べません
A賞 ゴジラ(2023) SOFVICS
全1種 約23cm 原型・彩色 酒井ゆうじ
SOFVICS
最後の1個を引くと手に入る！
ラストワン賞
ゴジラ(2023) SOFVICS
熱線放射ver.
約23cm 原型・彩色 酒井ゆうじ
G賞 キャンバス風イラストボード&ロゴステッカー
選べる全9種
キャンバス風イラストボード：A5サイズ／ロゴステッカー：約8cm
H賞 モンスターヘッドマグネット
全6種 約4~5cm ※選べません
2023年11月18日(土)より順次発売予定
※店舗の事情によりお取扱いが中止になる場合や発売時期が異なる場合がございます。なくなり次第終了となります。※画像と実際の商品とは異なる場合がございます。※掲載されている内容は予告なく変更する場合がございます。※掲載内容は2023年9月時点のものです。※「一番くじ」および「ラストワン」は登録商標です。
詳しい情報は一番くじ倶楽部をチェック!!▶
https://1kuji.com/products/godzilla4
または 一番くじ ゴジラ 検索
株式会社BANDAI SPIRITS
東京都港区三田三丁目5-19 〒108-0073
TM & © TOHO CO., LTD.


BANPRESTO
CRANE GAME
BANDAI NAMCO
12月登場予定
『ゴジラ-1.0』
怪獣咆哮撃 ゴジラ(2023)
＜全1種＞
怪獣咆哮撃
Monsters Roar Attack
11月登場予定
『ゴジラ-1.0』
鎮座獣 ゴジラ(2023)
＜全1種＞
鎮座獣
ゴジラ-1.0
アミューズメント施設に 続々登場！
※掲載内容は2023年9月時点の物です。※登場時期は予告なく変更する場合があります。
※商品の登場時期は各施設の状況等により異なります。※画像と実際の商品とは多少異なる場合があります。
※最新情報は「バンプレストナビ」をご確認ください。
TM & © TOHO CO., LTD.
LINE【@BANPRESTO】
X(旧Twitter)【@BANPRE_PZ】
バンプレストナビ


-1.0
S.H.MonsterArts
ゴジラ(2023)
2023年11月発売予定
メーカー希望小売価格：14,850円(税込)
酒井ゆうじ氏
原型・彩色・造形プロデュース！
魂ウェブ
tamashii web
tamashiiweb.com
魂ウェブ 検索
@t_features
@instamashii
Tamashii Nations Japan
TM & © TOHO CO., LTD.
株式会社BANDAI SPIRITS
コレクターズ事業部
東京都港区三田三丁目5-19 〒108-0073
BANDAI
※価格はメーカー希望小売価格(税10%)です。※画像は実際の商品とは一部異なる場合があります。※画像はイメージです。※この広告は2023年9月現在のものです。
※発売月は予定です。予告なく変更になる場合があります。※対象年齢15才以上。※この二次元コードはアクセス解析のためにCookieを使用しています。アクセス解析は匿名で収集されており、個人を特定するものではありません。この機能はCookieを無効にすることで収集を拒否することができますので、お使いのデバイスのブラウザの設定をご確認ください。

70

4 988104 142764

東宝

ゴジラ-1.0